

崎津古墓 1

熊本県天草市河浦町富津所在の近世墓調査報告書

天草市世界遺産推進室

2014

はじめに

天草市には豊かな自然と特徴的な歴史を背景として、都市や町場、農漁村、特有の自然・風土と共生した独特の景観が展開しています。なかでも、天草市河浦町崎津地区は、生業や居住、信仰などが、自然や風土と密接な関係をつくり出している地域です。

当地におけるキリスト教の伝播は、ルイス・デ・アルメイダ修道士による宣教を契機として、16世紀後半から17世紀にかけて信仰が浸透します。1614年の禁教令発布以降は、激しい弾圧がおこなわれ、信者は潜伏し信仰を継承し、潜伏信者の発見を契機に、集落に教会堂が建てられます。崎津集落は、漁村の中に教会がたたずむ独特の景観が評価を受け、平成23年、漁村として初の国重要文化的景観に選定され、平成24年6月には、集落が有す「弾圧」や潜伏キリシタンの生活痕跡を残す「集落」が評価され、世界遺産候補「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産に選ばれ、平成27年1月には「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」のユネスコへの推薦が決定しました。

このたび、崎津集落におけるキリシタン史の真正性・完全性を証明するため、集落内にある崎津古墓の調査を行いました。本書はその成果を取りまとめた調査報告書です。本書が崎津地区の歴史を紐解き、多くのみなさまの調査研究に広く活用されるとともに、市内のキリシタン史に対して理解が一層深まるための一助となることを願っております。

末尾になりましたが、調査にご協力いただいた住民のみなさま、関係市町のみなさま、関係資料を所蔵する関係機関に対して厚くお礼申し上げます。

2015年3月

天草市長 中村 五木



巻頭写真



崎津古墓







崎津古墓



例 言

1. 本書は、天草市観光文化部世界遺産推進室が調査を行った、崎津古墓調査報告書である。
2. 調査は、関係住民・関係市町・関係機関の協力を得て、天草市観光文化部世界遺産推進室が実施し、その調査体制は本文の第1章調査経緯と調査組織に明記した。
3. 本書で使用する実測図は、遺構を山内亮平及び福岡大学考古学研究室が、遺物・製図を山内が行った。
4. 本書で使用する写真は、山内が撮影した。なお航空写真については(株)空中写真撮影が撮影したものを使用した。
5. 本書で使用する方位は、世界測地系による座標北を使用した。
6. 本書の執筆・編集は、山内が行った。

本文目次

| | |
|----------------|----|
| I 調査に至る経緯と調査組織 | 1 |
| II 遺跡の位置と環境 | 2 |
| III 調査成果 | 11 |
| IV 集落内のキリシタン遺物 | 29 |
| V まとめ | 34 |
| 写真図版 | 36 |

指図目次

| |
|---------------------------------|
| 第 1 図 天草下島地勢図 |
| 第 2 図 崎津集落と崎津古墓位置図 (1/2000) |
| 第 3 図 河浦町周辺遺跡地図 |
| 第 4 図 天草市崎津・今富の文化的景観写真 |
| 第 5 図 崎津古図に描かれた崎津古墓 |
| 第 6 図 崎津古墓全体図 (1/150) |
| 第 7 図 S K - 1、12 実測図 (1 /80) |
| 第 8 図 S K - 10、22 実測図 (1 /80) |
| 第 9 図 S K - 19、25 実測図 (1 /80) |
| 第 10 図 S K - 17、18 実測図 (1 /80) |
| 第 11 図 近世墓塔実測図① (1/10、1/20) |
| 第 12 図 近世墓塔実測図① (1/10) |
| 第 13 図 崎津古墓出土遺物実測図 (1/3) |
| 第 14 図 崎津小高浜出土遺物実測図 (1/2、1/3) |
| 第 15 図 崎津教会史料館所蔵遺物拓本① |
| 第 16 図 崎津教会史料館所蔵遺物拓本・実測図 (2/3) |

図版目次

| |
|---|
| 図版 1 Ⅲ区、Ⅳ区全景 |
| 図版 2 Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅳ区全景 |
| 図版 3 Ⅳ区、Ⅴ区全景、S K - 2、S K - 5、S K - 10 |
| 図版 4 S K - 22、S K - 17、S K - 1 |
| 図版 5 Ⅲ区基壇状遺構、Ⅳ区南側全景、Ⅳ - 8 号墓、Ⅳ - 9 号墓 |
| 図版 6 V - 7 号墓、I - 8 号墓 |
| 図版 7 V - 22 号墓、Ⅳ - 20 号墓、V - 11 号墓、V - 23 号墓 出土遺物 |

I 調査経緯と調査組織

崎津古墓は、熊本県天草市河浦町大字河浦字崎津に所在する標高 40～60m の丘陵部にあり、面積は、約 4340㎡である。崎津地区は、中世以来の漁村として文献や地誌類に記述されており、集落内には複数の貿易に関係する資料が確認されている。また、アルメイダ修道士によるキリスト教の布教からキリシタンの弾圧・潜伏を経て、禁教令が解かれた後は集落中央に復活の象徴である崎津教会が建てられ、集落のシンボルとなっている。

天草市では、この景観地を守るため、平成 19 年より崎津の文化的景観事業を開始した。平成 23 年 2 月には「崎津の漁村景観」が選定され、平成 24 年 9 月には隣接する今富地区を含め、「天草市崎津・今富の文化的景観」が国の重要文化的景観に選定された。

その後、地域の有する弾圧・潜伏の歴史が認められ、平成 24 年 6 月世界遺産候補である「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産となり、平成 26 年 9 月ユネスコへの推薦が決定した。崎津集落では、古くから多数の宗教が混在する地域であり、信仰に漁村特有の文化や習俗を混交する。この崎津古墓には、集落の習俗を示す痕跡や宗教の多様性を把握する上で重要な位置を占めることから、調査を行った。1 次調査は、平成 26 年 3 月から 4 月に行い、崎津古墓の全容を確認するとともに、表土除去や掘削による確認調査を行い、本 2 次調査において、遺構実測、集落内のキリシタン遺物の調査を行った。これらの成果を受け、平成 26 年度に遺物・図面等の整理を行い、本書刊行の運びとなった。

調査組織

| | | | |
|-------------|---|------|-------|
| 総括 | 天草市教育委員会 | 教育長 | 石井二三男 |
| 調査確認者 | 観光文化部文化課 | 主査 | 中山 圭 |
| 調査責任者 | 観光文化部世界遺産推進室 | 室長 | 平田豊弘 |
| 庶務担当 | 同 | 室長補佐 | 丸林眞吾 |
| | 同 | 参事 | 中村大介 |
| | 同 | 主査 | 船島 剛 |
| 調査・報告書担当 | 同 | 学芸員 | 山内亮平 |
| 福岡大学 (業務委託) | | | |
| 総括 | 人文学部考古学研究室 | 教授 | 武末純一 |
| 調査責任者 | 同 | 教授 | 桃崎祐輔 |
| 調査参加者 | 一木賢人、高木龍弘、太田智、濱口真衣、池田拓、松田麻里、三好千絵、長安慧、輪内遼、臂政雄、田籠一貴、藤田優志、北村竣介、是石嵩伸、西田尚史、後藤泰志、大津諒太、宮本勇作、山口拓也、三島和花子、森門碧、福田有理、小野明日香、後藤智恵、波多江彩香 | | |

なお、調査にあたっては、熊本県文化課、長崎県世界遺産登録推進課、別府大学教授 田中裕介氏、大石一久氏をはじめ多くの方にご指導並びにご助言をいただいた。また、地元関係各位には、終始心からの支援とご協力を賜った。ここに記して、謝意を表したい。

II 遺跡の位置と環境

1 崎津位置と崎津古墓

天草地方は熊本県の西南部にあり、東シナ海、有明海、八代海の3つの海に囲まれた島嶼群である。平地面積は狭く、丘陵が面積の大半を占める。丘陵は海岸付近まで迫り、入り組んだ海岸線が続いている。接する海洋によって海岸線の姿は大きく異なるが、東シナ海に面した天草下島の西岸部は、洗い波濤により岩盤が浸食され、断崖絶壁が続いている。

この西岸部にあるのが調査区の崎津集落である。天草市河浦町崎津は天草下島の南西部、東シナ海に開口し、海食輪廻による小湾が数多く形成されている羊角湾北岸に位置する。羊角湾は、陸域の沈降によるのではなく、最終氷期以降の気候の温暖化に伴って海面が上昇した結果、海が低地に深く進入したものである。

羊角湾のひとつきわ入り組んだ小湾に面する崎津の山地の標高は低く、標高400m以下の山地が寄せ集まっている。山地は南北に伸びており、この地域の東端には一町田川が大きく屈曲しながらも、羊角湾に注いでいる。山岳丘陵が海岸まで迫っているため、山と海との間のわずかな平地に集落がつくられ、聖地や墓地などは、山中を掘削することで営まれた。

崎津は、16世紀より港湾が形成され、漁村として栄えた集落であり、キリスト教の布教から、今日に至るまでのキリスト教伝来プロセスをみることができる。なかでも、崎津集落は弾圧・潜伏の歴史が価値を担保しており、潜伏時代から集落の骨格を構成している主要な道や宅地、信仰の場所などが残され、信仰を装うために信者となった在来の神社とカトリック復帰後の教会堂とが現在もなお共存している。集落で行われる宗教行事や民俗行事は、神社と教会堂を巡り、祭礼の空間を共有している。これらは信仰が継続するなかで形成された日本の伝統宗教とキリスト教信仰の交流と共存の姿を表す集落である。

崎津諏訪神社の南西丘陵部に所在する崎津古墓は、標高20～60mに位置する。この近世墓は、旧崎津村の旦那寺である江月院の末庵の普應軒創建（1732以前）に伴って開創されたものである。丘陵尾根を段切造成し、テラス状の平坦面を形成した上に、200基の墓塔を祀る。現在、崎津古墓は参拝・埋葬に利用されていないが、住民により最低限の管理が行われている。

現在の墓地は、金比羅山中腹、普應軒背後の斜面を段状に造成することで共同墓地が営まれている。墓地の階段には棄却された、江戸時代からの近世墓塔身が再利用されており、墓塔の総数は500基を超える。



第1図 天草下島地勢図



第2図 崎津集落と崎津古墓位置図 (1/2000)

2 天草の歴史的環境

天草の旧石器時代遺跡は、6遺跡が確認されている。牛深市内ノ原C遺跡出土のナイフ形石器は三万年～二万六千年前に降下した始良カルデラ火山灰層下の石器と類似し、妻の鼻遺跡の石器はAT火山灰層直上から出土するナイフ形石器に伴う可能性が高く、三万年以前から以降の時期にあたる。二万年～一万八千年前の最寒冷期には、現在よりも海面は140mも低かったと考えられており、当時の有明海は完全な陸地であり、海底から引き揚げられるナウマンゾウの化石などからみて、大型草食獣を狩猟する集団が残した旧石器時代遺跡があったとしても、その多くは海中に水没したと考えられる。よって天草諸島で見出される旧石器は、比較的高地に適応したグループの痕跡であると考えられよう。なお、丸尾ヶ丘遺跡の細石核は、細石刃文化でも古い段階にあたる。下塔尾遺跡の細石核の形態は船底形に近く、縄文草創期にかかると考えられる。

縄文遺跡はおよそ200か所の遺跡が確認され、羊角湾周辺地域一帯でも遺跡数が増加する。しかしその大半が表採資料であるため、遺跡の全容はわからない。資料から草創期から晩期までの遺跡の分布がわかり、特に前期と後期の比率が高い。その分布はほぼ全島に及び、①海岸部から海底にかけて位置する遺跡群と②河川に沿った段丘面や山麓部に分布する遺跡群に大別される。前者は遺跡規模が大きく、遺物の量・種類が豊富であるのに対し、後者は小規模で遺物もほとんど出土していない。海底遺跡は、天草諸島における遺跡分布の特徴として挙げられ、旧大矢野町・松島町・本渡市・天草町・河浦町・新和町・牛深市・有明町など旧二市五町で40

か所以上確認されている。時期は早・前期の遺跡が多いが、後・晩期まで継続する遺跡も存在し、一概に海進・海退の影響とは言いがたい。海底遺跡群はほぼ北東から南西にかけて分布するため、地震などの地殻変動との関係も考えられる。五和町に所在する沖ノ原貝塚は前期から晩期に至る複合遺跡で、岩礁性貝類の貝塚から西北九州型結合釣針や装身具など豊富な骨角製品が出土している。また特異な高坏形土器は、脚部が動物の足を模したものかとみられている。特に後期・晩期の比重が高く、膨大な双角状礫器が採集されており、特に貝類採集に傾斜した漁労活動が推定される。同町一尾貝塚は、中期の並木式・阿高式、後期の南福寺式・出水式・市来式・鐘ヶ崎式・北久根山式が出土しているが、主体は後期で、中期の土器は極少で地点も異なる。出土石器は石鏃、石鋸、石銚、尖頭状石器、スクレイパー、磨製石斧、擦切具、双角状礫石器などで、特に膨大な量出土する双角状礫石器は貝類の採取に関わる。骨角器・貝製品は釣針・離頭銚・ヤス・骨ベラ・筭・耳飾・貝刃・貝錘・貝製装飾品・貝玉・歯牙製玉・貝輪等約 150 点出土している。特にテングニシの殻軸で作られたオサンニ型結合釣針の軸部は朝鮮半島との関係を考える手掛かりとして貴重である。河浦町に近い牛深市深海町の椎ノ木崎遺跡では、中期の阿高式・並木式から後期の南福寺式・出水式・辛川式に至る複合遺跡で、遺物包含層の下部は現在の満潮線より低く、わずかな面積が試掘されたに過ぎないが、特殊泥炭層より編みカゴの破片やドングリ類、石銚や石鋸が多数出土している。

天草の弥生時代遺跡は、縄文時代と比較して非常に少なく、約 20 か所が知られているに過ぎない。前期では下島北部の苓北町志岐原遺跡では板付Ⅰ式に共伴する夜臼式の小型壺と今山産玄武岩製の磨製石斧が出土し、墳墓の副葬品とみられる。五和町沖ノ原遺跡では弥生時代の埋葬人骨 16 体が調査され、副葬品として板付Ⅱ式の小壺とアワビ 2 枚が出土した。中期になると若干遺跡数も増加し、前期から継続する沖ノ原遺跡のほかに、五和町御領の中尾遺跡や本渡町の浜崎遺跡・亀川中学校校庭遺跡・鳴子崎遺跡などがみられ、遺跡分布の拡大を見る。後期には下島南部および大矢野島から松島町にかけての遺跡が見られ、小児用甕棺の出土した松島町鬼塚遺跡や前島遺跡、生活地として大矢野町野米貝塚・梅ノ木貝塚でマガキを主体とする貝塚が形成されている。天草市浜崎遺跡では土器片や太形蛤刃石斧が出土しており、亀川中学校遺跡では中期前半の城ノ越～須玖Ⅰ式期頃の住居跡が存在したらしい。また鳴子崎 A・B・C 遺跡では縄文時代の遺物に混じって弥生終末の大型貯蔵用甕片が出土している。

古墳時代になると天草には多数の古墳・遺跡が造られるその多くは、本渡周辺に集中し、羊角湾沿岸では調査が進んでいない。天草の島嶼部では、大矢野島付近までは横穴式石室の石障に様々な浮彫を施した長砂連古墳に代表される中期古墳の展開が目立つが、下島では地下式板石積石室墓のような南九州の在地墓制が先行する。亀川妻の鼻墳墓群の地下式板石積墓から出土する大量の鉄製武器の多くは、倭王権によって配布されたと考えられる。

この時期の天草は、北部九州から南島、あるいは東中国海の海上交通にあたって、中継地点であったと考えられる。八代海を望む宇土半島南岸の高台に位置する不知火町国越古墳は、全長 62.5m の前方後円墳で、円筒埴輪のほか、人物・器材埴輪などを樹立する。阿蘇溶岩の切石で構築された横穴式石室は両袖型玄門付で、奥壁寄りに石屋形状の石棺を設け、直弧文・連続三画文を施し、赤・青・緑・白の彩色がある。遺物は銅鏡 3、玉類、金環、銀環、金製空玉、鉄刀、鉄鏃、鉄銚、帯金具、鉄製農工具、雛形鉄製品、馬具などで 6 世紀前半から中葉の築造



第3図 河浦町周辺遺跡地図

- 1 上木原遺跡 2 大江遺跡 3 大江城跡 4 祈りの塚 5 荒尾岳遠見番所跡 6 高浜城跡 7 高浜窯跡 8 福連木城跡
 9 茶園原遺跡 10 大山遺跡 11 大川内遺跡 12 仕山遺跡 13 鬼塚古墳 14 鼻崎古墳 15 主留海岸 16 水ノ浦貝塚
 17 九浦遺跡 18 丸山遺跡 19 下田城跡 20 妙見遺跡 21 馬場遺跡 22 河内浦城 23 天草学林跡 24 一町田八幡宮貝塚
 25 平畑遺跡 26 平野遺跡 27 平野遺跡(縄文) 28 小河内貝塚 29 折尾遺跡 30 段の原遺跡 31 崎津古墓

とみられる。出土鏡のうち画文帯神獸鏡（江田船山古墳鏡と同型）・対置式四獣鏡は中国南朝・宋からの舶載鏡とみられ、また銅鏡（径 6.8cm，高 4.2cm，高台径 2.2cm）も中国南朝製の可能性が高い。よって被葬者は、倭王権の中国南朝への遣使にあたって重要な役割を果たした人物であったと考えられる。

天草下島でも 6 世紀後半～7 世紀になると小規模な横穴式石室墳や横穴墓など、本土とかわらない構造や副葬品がみられるようになり、墓制変化の背景を考える上で、集落や生産遺跡に注目したい。

古墳時代の天草海浜部では、5 世紀中葉から 7 世紀にかけて、土器製塩がおこなわれ、椀形の身部に長い柱状で基部が自立出来るように裾部に小さな平坦面をそなえる天草式製塩土器が大量に出土する。沖ノ原遺跡、宇城市三角町の大田尾遺跡、上天草市大矢野町の小波戸遺跡では、大量の天草式製塩土器の脚部とともに、5～7 世紀の須恵器や土師器が出土し、古墳時代中～後期の海村の存在が推定される。天草周辺の群集墳や横穴墓の展開とも、密接にかかわると考えられる。また製塩土器の脚部ばかり多く出土するため、塩の入った身部だけが搬出され、脚部は追って廃棄されたと推定されている。なお東海地方の伊勢湾岸にも、同様な製塩土器の出土が見られるが、同時期には九州系の竪穴系横口式石室が東海地方に拡散する。おそらく 5 世紀には、少数の阿蘇ピンク石石棺が大阪府長持山古墳・唐櫃山古墳、岡山県築山古墳など、畿内や瀬戸内に搬入されていることが物語るように、全国的な交通網は整備の途上にあり、九州南部と畿内・朝鮮半島の往来は何らかのイベントを契機とした限定されたもので、それも専ら水運を媒介としたものであったと考えられる。

歴史時代

天草の古代遺跡も少なくその実態は明らかではない。10 世紀に編纂された『倭名類聚抄』によると、天草郡には波多、天草、志記、恵家、高屋の五郷が記されている。福岡県福岡市鴻臚館遺跡では、「肥後国天草郡志記里」銘木簡が出土しており、志記里から肥後国衙を通じて鴻臚館に物資が運ばれたことがわかる。この五郷の名称から、志記郷は苓北町の志岐（天草下島北部一帯）、天草郷は、本渡から河浦町（天草下島中部域）波多郷は宇土半島西端の三角町波多（上天草市大矢野島一帯）が想定され、恵家、高屋については、特定できてはいない。この古代の五郷が中世天草五人衆の知行地の基礎を成していると想定される。なお大矢野島と維和島に挟まれた海峡の禿島・兜島付近の浅瀬では、奈良時代前半期の鴻臚館式の軒平瓦や、平安前期の平瓦、平安後期の陶磁器などが採集され、沈船の存在か、元々この地で利用されていたのか不明な点は多いが、この地で使用されていたもので有るとすれば、『続日本紀』の天平十六年五月記に記された、「肥後国雷雨地震す。八代、天草、葦北三郡ノ官舎、并に田二百九十余町。民家四百七十余区。人千五百二十余口水漂没せ被る。山崩二百八十余所。圧死人四十余人有り。並に賑恤を加ふ」の記録から災害との関係が示唆され、いずれにせよ、郡司あるいは郡衙が存在した可能性を想定したい。中世における天草武士団の発祥は、筑前国原田氏、肥後国菊池氏等の一族が各地の地頭として天草に移入したことを契機とし、徐々に在地領主となり、地域支配の基盤を整備していく。中世前期の在地領主の居館址と考えられる本渡地域の浜崎遺跡からは、豊富な貿易陶磁器・カワラケ・石鍋等が出土した。なかでも中国南宋代、12～13 世紀の白磁・

青磁に墨書のあるものを含むことが注目される。また「極楽寺跡」伝承があり、五輪塔・宝篋印塔の残欠が残る。鎌倉前期の『志岐文書』貞永二年（1233）「天草種有讓状」によれば、天草種有は「本砥島地頭職、河内浦・おほみ浦・高浜・ひらうら・うふしま」を諸子に譲っているが、種有の法名は「極楽」で、阿弥陀信仰の念仏者であった。浜崎遺跡の出土遺物は13世紀を主体とし、豊富な貿易陶磁器などからみて有力領主の存在を窺わせる。極楽寺跡の伝承、文書と天草種有の法名、金石資料、出土遺構と遺物を合わせ、浜崎と天草氏の関係が考えられる。天草種有は「本砥本主」と呼ばれていて、その所領は「開発重代私領」とされており、本領主職であったとみられている。

国道266号線沿いの亀場町亀川の亀川中学校裏手には、五輪塔群が集められて祀られており、中世の来迎寺に関連するとみられている。本砥島の開発領主天草種有の娘で嫡子として家督を継いだ播磨局（尼妙性）は、父の菩提を弔うために来迎寺を建立した。『志岐文書』七号「宮地村地頭仏意重陳状案」には、「以開発重代私領内新開 令建立当寺」とあり、本砥島内で新たに開発された亀川を来迎寺の寺領としたことがわかる。なお播磨局（尼妙性）はその後志岐景光（専阿）の後妻となった。

このため播磨局（妙性）の継子にあたる志岐景弘（弘円）は正和二年（1313）、天草氏の本砥地頭職を奪取した。鎌倉末期の志岐氏は、北条得宗被官としての立場を利用し、鎮西下知状を得て本砥島の地頭職を獲得した。しかし『志岐文書』八号建武四年（1337）「一色道猷範氏書下」や同九号「藤原範綱請文」より志岐隆弘に本砥島と亀川の地頭職が与えられた際、河内浦大夫三郎入道が城郭を構え妨害し、宮地村（天草市新和町）の弥二郎入道仏意も弘円と争論を繰り返して抵抗したことがみえる。

このように弘円は建武四年（1337）には九州探題一色道猷、貞和五年（1349）には足利直冬、応永六年（1398）には菊池武朝の安堵を得るなど、北朝側に立ちつつも状況に巧みに対処して地頭職を既成事実化するとともに、来迎寺を破却して天草氏勢力の一扫をはかった。

一方本砥の天草本宗家は、天草種有の孫種増が播磨局の養子となり、弘安の役（1281）で勲功をたて天草大夫に任ぜられたというが、種増の子の種胤、孫の資種の時代には河内浦を相伝したとあるだけで、本砥惣領職・亀川を奪われて没落したとみられる。しかし天草氏の傍流にあたる河内浦大夫三郎入道らが勢力を回復し、志岐氏に対抗して南朝側につき、志岐氏の本砥・亀川での地頭職承認を拒否した。『阿蘇文書』の「天草郡本砥島地頭天草大夫三郎入道跡」、『深江文書』の「天草郡内本砥河内浦（天草十郎大夫跡）」、『広福寺文書』の「天草大夫大蔵種国」にみるごとく、彼らは「天草大夫」と自称し、大蔵流天草氏の伝統的支配権の継承者であることを強調している。『深江文書』の記述からみて資種の子、種世の時本砥・亀川・河内浦・大江・島子を相伝とあり、この頃までには惣領を回復していたことがわかる。来迎寺跡の宝篋印塔中に「応永□年妙永禅尼」とあり、14世紀末には天草種世によって亀川が奪回され、来迎寺も復興されたと推測される。正平二十年（1365）には天草種国が菊池氏ゆかりの玉名石貫の広福寺に仏物を寄進している点からみて、勢力回復には菊池氏への軍忠もあるようである。

室町中期になると、上島南西部に栖本氏、下島南部に久玉氏が台頭し、いわゆる天草五人衆が成立する。彼らは肥後本土の菊池氏と相良氏の抗争では菊池氏側に立って戦功を挙げるが、この間に河内浦の天草氏は勢力を拡大し、旧領をめぐる志岐氏や上津浦氏と抗争した。永正

二年（1505）には相良長毎と結び守護権を回復した菊池能運の命で本砥を志岐氏に、島子を上津浦氏に譲渡し、河内浦に一旦退去するが、まもなく天草尚種は久玉・宮地両氏を併合し、享禄年間（1528～1532）には本砥・島子を奪回し、諸氏を糾合して上津浦氏を攻撃した。上津浦氏は相良義滋に救援を求め、援軍に天草勢は敗れ天草は相良氏の支配下に組み込まれた。その後相良氏の圧迫を受けた長嶋氏は薩摩に逃れ、以後天草五人衆（志岐・天草・大矢野・栖本）の時代となる。こうした背景のもと天草には多くの城館が営まれた。河内浦町河内浦城は、標高50mの尾根筋の山で、「城山」という字名が残っている。円形状の平坦地を有する山頂部分は、切り開かれて神社の敷地となっている。山頂直下の斜面には、「削り落とし」の跡が認められる。現在、窪地は畑地に利用されているが、堀切の埋没が考えられる。北西方向に下る斜面には、迫を主として数十段に及ぶ階段状地形の重なりがある。それぞれの段差面には高さ1～2.5mの石塁が残っているところから、昭和五十一年には「石塁を有する県下最大の山城」として新聞に報道されたことがあった。しかし、その後の調査で、この階段状地形と石塁は、天草地方に特有な棚田形式の水田跡であることが判明した。城跡の北西方向0.5km先にも、一町田川を挟んで城跡と伝えられる所がある。現在、この地は「崇円寺」の敷地となっている。河内浦城では中国陶磁器（青磁・青花・八角白磁杯・磁州窯龍文壺）、ベトナム陶器などが出土している。同町宮野河内城は、比高15mほどの、船津湾に突き出た尾根筋にある。上面には47m×23mの楕円形状の平坦地があり、南側斜面には数段の階段状地形が刻まれている。県道の対岸には中世寺院と伝える明照軒寺の跡が確認され、周辺一帯には五輪塔の残欠部が数多くある。

近世

近世に入ると、天草は豊臣秀吉の国内統一の過程でキリシタン大名小西行長の領地となる。このためもあって天正十九年（1591）から慶長二年（1591）年まで、宣教師を養成するコレジヨが河内浦にあった。ここに、天正少年使節の4名も入校している。慶長5年（1600）関が原の戦いのあと、天草は肥前唐津の寺沢高領となる当初寺沢氏はキリスト教に対し寛容な姿勢であったが、幕府の禁教令により厳しい弾圧を加え、領民はキリスト教から仏教へ転宗した。寛永十四年（1637）10月天草四郎を総大将として島原・天草の乱が勃発する。有明沿岸の農民は一揆に参加し、原城で討ち死にしている。

乱後、天草は天領となり初代代官として鈴木重成が着任する。重成は宗教政策を展開し、仏教なかでも禅宗への転宗を推進する。しかし、天草氏領の崎津・今富・大江では、潜伏キリシタンとして信仰が継続された。天草は富岡町に代官所が置かれ、87村に区分された。この87村は10組にまとめられ、村には、庄屋、組を統括する山方番役、海上・海浜を監視する遠見番役を設置するなど、江戸時代の支配体制の基礎を構築している。

文化二年（1805）、崎津村を含む大江、今富、高浜村の4ヶ村で全人口10,669人の約半数にあたる5,205人の異宗信仰者が摘発された「天草崩れ」が発生した。江戸幕府によるキリスト教の禁止により、近世日本にはキリスト教信者が表面上存在していないことになっていたが、今富集落等、禁教時代の信仰を捨てずかくれ信仰を継続するなど多く存在した。そのなかでも、禁教時代のかくれ信仰時に共存・混同した仏教や神道、修験等の宗教行事については、現在でも天草の人々の生活の中でもその様子を伺うことができる。

江戸幕府は江戸時代を通じて4回（慶安・正保・元禄・天保年間）ほど、郷帳と城絵図、国絵図の作成・提出を命じている。熊本県内には約600の中世城郭が収容されているが、正保図の説明にはわずか61城を収録するにすぎない。このうち天草では、志岐古城・下田古城・久玉古城・小宮地古城・中村古城・大浦古城・上津浦古城・大島子古城・志柿古城・馬場古城・佐伊津古城・同村古城・下内野古城・城木場古城の15城が収録されている。

また、天草は豊富な磁土（天草陶石）の産出で知られる。磁土は鉱物でいえば石英斑岩に該当し、古墳時代より、天草砥石として利用されてきた。近世には寺子屋用の大型硯としても利用されてきた。17世紀前半に肥前有田で磁器生産が開始されると、有田泉山の磁土は鍋島藩の管理下に置かれ、周辺の陶工は炆器類の陶器しか作れなかった。寛文二年（1662）に伊万里に近い三河内で、平戸焼の創始者とされる今村三之丞の子の如猿が天草産砥石を利用して白磁を造ったと伝承し、また正徳二年（1712）には、木原の人横石藤七兵衛がその子藤次左衛門の早岐より持参の天草砥石によって造ったとも伝えられている（上田滋穂1961）が、その後砥石の販路は大阪や京都清水焼にも拡がったが、それ以前から天草でも磁器の生産が試みられたようである。また有田などで良質の磁土が枯渇し、江戸後期に各地の産業振興策の中で磁土が乏しい薩摩平佐や伊予砥部などでも肥前系磁器の生産が始まると、天草陶石の流通が盛んとなり、天草陶石関連文献資料が伝存し熊本県資料となっている。

天草の磁器窯は、高浜村を中心にして小田床村、富岡町吉田や下津深江等にもあり、本渡楠浦の窯跡からも磁器片が出土している。高浜や楠浦採集の磁器片のうちには、17世紀前半～中葉の初期伊万里にも通じる作風のものがみられ、少なくとも17世紀中頃には磁器生産に着手したと考えられるが、これらに関する記録はなく、成立年代は確証を欠く。小田床村窯は宝暦二年（1752）の開窯としている。

天草の磁器窯跡は、『上田家文書』の中に、享保十七年（1732）下津深江村に大村領三ツ殿（波佐見）の焼物師たちが来島し窯を創めたが、翌年渡世なりがたしとして、引き揚げた記録を初見としている。その後の記録によれば、高濱庄屋上田傳五右衛門武弼が農民に職を与えるため、「當村皿山焼物仕立候初ハ去ル寶暦十二年（1762）肥前大村領 焼物師共雇入」とあり、肥前長與山の山路幸右衛門ら数名の陶工を招き高浜村鷹巣山麓に開始したが、陶工たちは土焼師であったため南京焼（白磁染付）未熟にて失敗、さらに明和四年（1767）窯を再編成し、明和八年（1771）、天草に来島した平賀源内は、代官揖斐十太夫に次のような工夫書を提出し、その改良発展を促した。「天草にても高浜村庄屋焼覚候得共細工人不宜候故器物下品に御座候 私存付候は天草か長崎にて功勞ある職人を呼集段々職人共を仕込候得ば随分上焼物出來可仕奉存候・・・平戸焼など随分奇麗に御座候へ共未俗を離れ不申候・・・譬唐物阿蘭陀物を傍ら置寫候ても心に風流無御座候故自然と下品に相成候 畢竟天草之焼物土は南京阿蘭陀之土よりも拔群宜御座候得共形不風流に御座候 故日本人は外國物を重寶仕高価を出候・・・」と述べている。その後、安永六年（1777）には長崎奉行柘植長門守から紅毛人（オランダ人）向焼物の焼方を命じられ、白磁染付、赤絵染付、金襴手等も製作し、出島オランダ屋敷への売渡しを企図、安永七年（1778）より出島での店売りを行ったが、思うように売りさばけなかったと記している。

高浜焼は天保年間（1830～1844）に一時衰えたが元治年間（1864）より再び焼窯を築いている。現在、高浜に残っている登窯はこの時期のもので、崎津古墓で採集される染付磁器

類もほとんどが高浜産と思われるが、上手物は少なく、ほとんどが粗製の雑器類である。

3 文化的景観の価値

当地区は先述のとおり、国の重要文化的景観に選定されている地域である。

当地の文化的景観は、漁村の崎津と農村の今富が補完し合うことで生業を形成した地域である。古来より崎津では漁業を、今富では農林業を生業としている。両集落ともに狭隘な土地に集落が形成され、崎津では軒を連ねる家々に挟まれ形成される海に出るための小路トウヤ、その先には船舶碇泊や漁具整備の施設である海上構造物カケが設けられ、狭い土地の中で効率の良く生業を行う工夫が窺える。今富では、今富川の2つの支流と、後背山に囲まれた迫地形に集落が点在し、江戸中期以降に行われた干拓事業により農地を拡大した。崎津からは豊富な海産物が、今富からは農・林産物や石炭などが往来するなど、両集落は互いに依存しあうことで生活基盤をたてた。明治時代後期において、当集落の隣町にある大江教会に赴任していた、ガルニエ神父が崎津天主堂を兼任・布教する際に往復し



第4図 天草市崎津・今富の文化的景観写真

た「神父道」と呼ばれる峠道がある。九州大学に所蔵されている「天草郡公料私領御領主御支配交代年曆鑑」には村々を繋ぐ道が描かれており、崎津の「メゴイナエ」と呼ばれる行商はこの峠道を利用し、生活物資を運搬した。これらの道は生業だけではなく文物交流も行われ、崎津は中世以来の海路、今富は陸路における交通の要衝であった。

また、こうした地勢的特徴を活かした生業を営むなかで、キリスト教という信仰要素が在来の伝統や文化に融合している。崎津では水方を中心とした組織を作り、祭礼や年中行事などに信仰要素を反映しながら、潜伏キリシタンとして信仰を継続した。地区内に残る信仰対象遺物がアワビやタイラギ貝など海に関するものが多いことも特徴のひとつである。明治期の解禁以降には、仏教徒となっていたかくれの人々の多くが布教時のキリスト教に転宗した。昭和9年には、庄屋役宅跡地にゴシック様式の崎津教会が建てられ、現在に至るまで集落のシンボルとして佇んでいる。復活と共にかくれ信仰は途絶えたが、現在までキリシタン時代から複数の信仰が続けられた地域である。

Ⅲ 調査成果



第5図 崎津古図に描かれた崎津古墓

広大であるため、今回は、崎津諏訪神社南の東西に伸びる標高 20～60 mの丘陵に営まれた墓域を調査区に設定した。調査区は、丘陵尾根を平滑に掘削することで平坦面を形成しているが、うち数ヶ所は掘削せず、なだらかな尾根を墓域として利用している。その墓域において、170基の立碑、27基の基壇状遺構を確認した。現在も利用されている崎津共同墓地内には、江戸時代～明治時代のものも含み、墓地階段には、古式の墓塔が利用されており、現状で把握できたのは調査区を含め 350 基程度であるが、コンクリート舗装された通路内にも墓塔が含まれていることを勘案すると、崎津古墓に祀られた墓塔の総数は 500 基を超えると想定している。

古図中に描かれた墓域には、墓塔が散見しているが、実際に調査区内・外において寺庵創建直後の紀年銘を有す墓塔が確認でき、崎津古墓は、丘陵頂部から段階的に造営されているわけではなく、古式の墓塔を造立したのち、墓塔や遺構の隙間を縫うように新式の墓塔を造立していることがわかる。

今回の調査では、墓塔の原位置を把握するための地形測量、立碑の測量調査、自然石を組み上げて造られている基壇状遺構の状況を確認するため、表土除去後、遺構の測量調査を行い、遺構調査終了後、崩壊している基壇状遺構を除去し、地下遺構確認のためトレンチによる確認

1 はじめに

崎津古墓は、地元の住民から、「ゲンザマツ（元座松）」と呼称している。これは、墓域最上段に松の巨木の元に墓地を営んでいたことから付けられた呼称と言われる。

現在、現地では松の巨木は確認できないが、江戸時代後半の作例と想定されている「崎津古図」（天草コレジヨ館所蔵）には、古図中央左に描かれた諏訪宮（現在の崎津諏訪神社）の南側に、「墓地」と墨書きされており、墓地最上段にはひときわ大きな木が描かれている。墓地の下には、寺庵が描かれている。これは享保十七（1732）年以前に創建された大江江月院の末庵である普應軒であり、寺庵背後に営まれた墓地も、創建時を前後する期間に造成されたと想定する。

崎津古墓は、墓域範囲が非常に

を行った。以下、調査の概要を報告する。

2 遺構の配置 (第6図)

墓域中央には、墓地が造成された18世紀中葉に整備された通路が東西に走り、墓域はこの通路を挟むようにして、南北の尾根を掘削し平坦面を造成している。本調査では通路や急勾配の斜面など明確に区画された範囲を、I～V区に細分し調査を行った。

なお、本書で記載している基壇状遺構は、近隣地区のキリシタン墓の伝承がある集石墓や、長崎県長崎市・平戸市を中心に分布する通称「長墓」のように墓地の可能性はあるが、地下遺構を有さず自然石を組み上げた構造物を称しており、詳細は後述する。

I区

I区は南側斜面、標高57.5～56m程に造られた調査区内では最上段にあり、現在の崎津共同墓地の背後にまで至っている。本区は東西4.5m×南北23m、谷部に向かって細長く伸びるテラス状の区画を掘削し、平坦面を造り出している。また、最上段より一段下に形成された標高54.0m～52.4m、東西3m×南北25m、最上段よりもさらに長く伸びるスリット状の尾根をほとんど掘削せずに利用している。

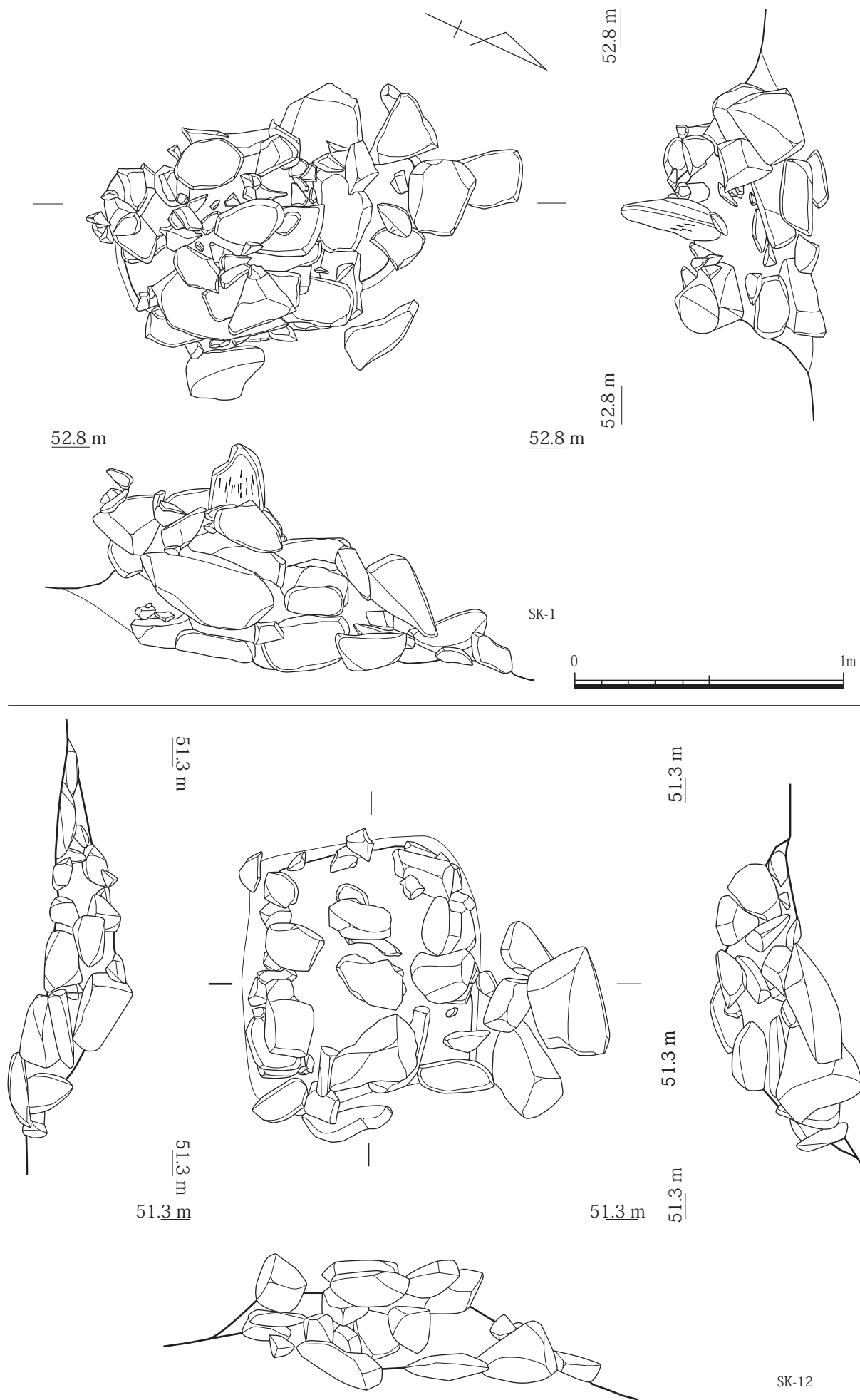
現状、I区には15基の立碑、2基の基壇状遺構を確認した。そのうち上段区域の南に位置するI-1号墓、3号墓、北側に位置するI-11号墓、12号墓は立碑周辺を自然石の石列で区画を作りだしており、「イエ」の区画を明確に意識している。また、下段は平坦面を形成していないためか、墓塔数は少ないが、墓塔を伴い斜面に形成された基壇状遺構が確認できる。

墓塔には「俗名浦壁平吉」、「文化十西 十二月廿四日 俗名浦壁新蔵」など浦壁家の名前が確認でき、これらの墓塔には家紋と想われる二重沈線の六角形陰刻が施されている。また墓塔の年代は、1776年、1780年、1783年、1787年、1793年といった文化二年(1805)の「天草崩れ」以前のもものが多く、基壇状遺構内に崩れ落ちている墓塔の型式からも同様の時期が創造でき、当地区は普應軒の創建直後から造営された墓域であると考えられる。

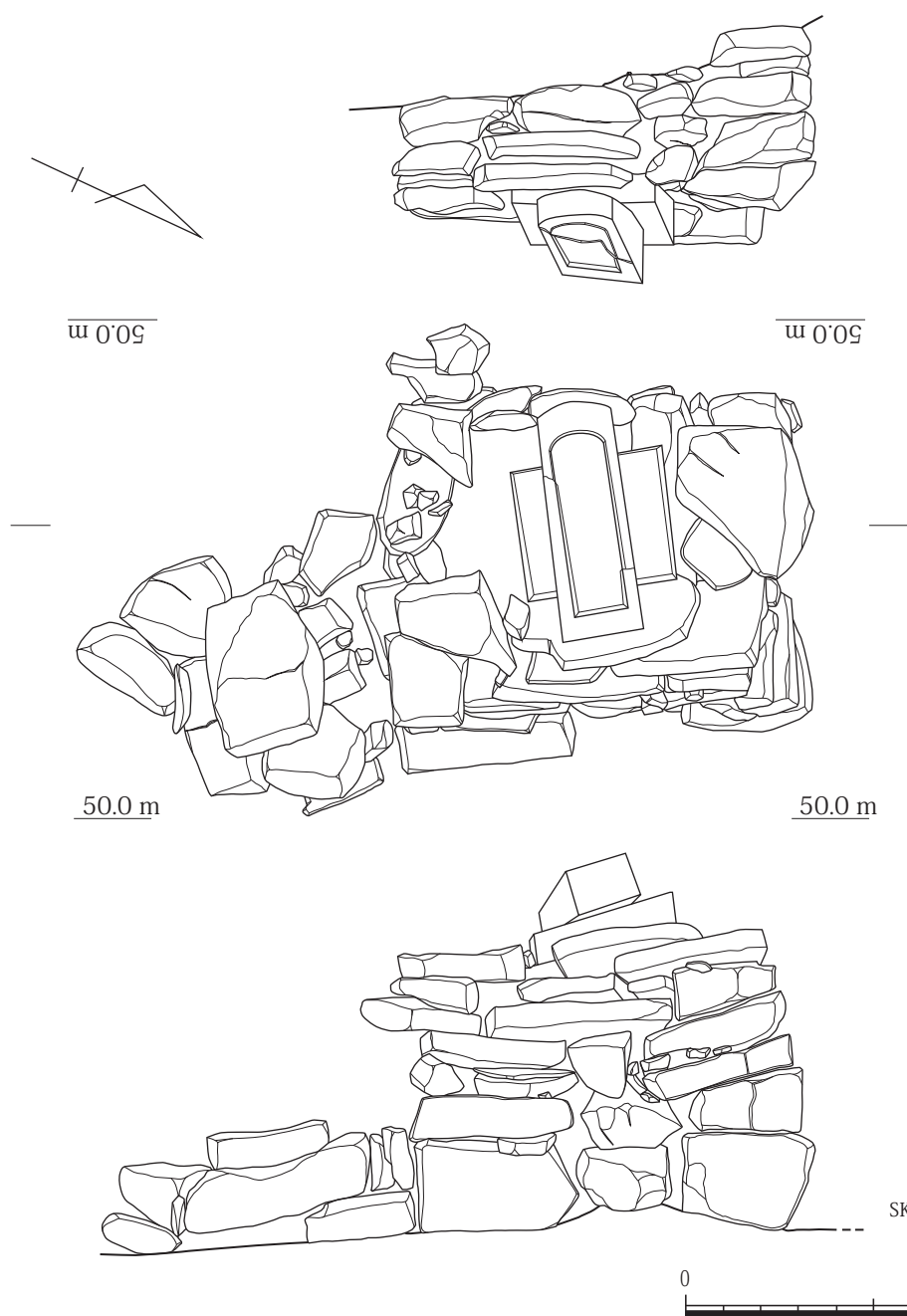
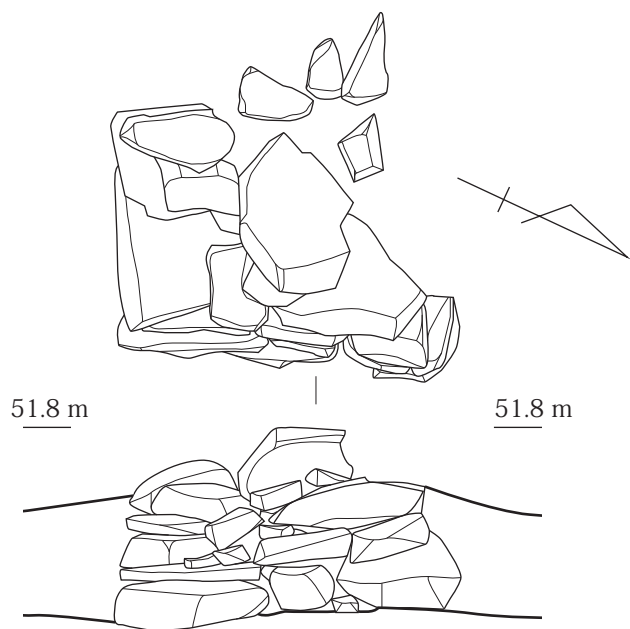
II区

II区は、I区の通路を挟んで北側の尾根部斜面に掘削により2段の平坦面と、掘削していないだらかな尾根に1段に営まれている。標高は57.4m～53.5mに位置し、尾根部に営まれているため、各面の面積は、上段は東西4m×南北8.5m、中段は東西3.5m×南北7.5mのテラス状の区画、下段は、東西約1m×南北約5mの自然な尾根頂部を利用した区画のため比較的狭い。なお、中段は掘削後、上段との区画と土留めのために石張りが施されている。

現状、II区には5基の立碑と、9基の基壇状遺構を確認した。基壇状遺構のなかでもSK-1は、平滑な自然石碑を祀られている。また、基壇状の石組みは他地域のものと比較すると、非常に乱雑に積まれている。立碑の紀年銘から1788年、1789年を確認されるため、I区同様の時期に造営された墓地である。また、基壇状遺構内より出土した紅皿の型式から、18世紀中葉から19世紀初頭に上限を求めたい。なお通路の表土を除去すると、II区周辺には1～2cm程度の玉砂利が通路状にしかれていることがわかった。長崎地方の潜伏キリシタンや崎津周辺のキリ



第7図 SK-1、12実測図(1/80)



第8図 SK-10、22 実測図 (1/80)

シタンらは、墓地へ埋葬する際や、回忌にあわせて玉砂利を墓周辺に追加していくという。また、大分県白杵市下藤キリシタン墓においては、墓域の中心地に十字架を立て、これに向かう為の通路に玉砂利を敷いている。崎津古墓通路に敷かれた玉砂利の性格が、どのような意味を持つのかは不明だが、他地域のキリシタン墓や民俗事例と同様、キリシタンの葬送儀礼と関係性があることは否めない。

Ⅲ区

Ⅲ区は、Ⅱ区の下段に位置しており、掘削時の段切造成により1mほどの高低差がある。そのため、立碑や自然石で階段を作り、両地区をつないでいる。通路を挟んで南と北側に分かれる本地区は、南側は標高55.5m～52.0mに位置し、Ⅰ区同様谷部に向かう細長いスリット状の尾根、東西2.2m×南北4.8mを掘削することで平坦面を形成している。また、通路を挟んで北側は、標高52.5m～43.0mに営まれ、地形上2段に分かれる。上段が東西7m×南北9mと調査区最大の掘削面積であり、下段は東西3.5m×南北4mの2段を造りだし、各段は自然の尾根丘陵線を利用している。なおⅢ区中央には、1.6m×1.2m、深さ1mほどの用途不明の坑が確認される。

Ⅲ区には21基の立碑、15基の基壇状遺構を確認した。墓塔については塔身だけで110cmを超えるⅢ-8、9号墓が調査区最大を誇り、基壇を2段配置した後に墓塔を安置するなど、旧崎津村において財力を有していた人物の墓塔と考えられる。また紀年銘より、「薩摩屋平治郎」や「吉田兼平叟」など地域に残る古文書にも姓が散見する商人や庄屋関係者の墓塔が多いこと、斜面地でありながらも、どの面よりも丁寧な平坦面造成を行っていること、崎津古墓の中心に位置し集落を一望することができることから、墓地造営当初より、財力・権力者の墓域として整備されたのではないかと想定している。

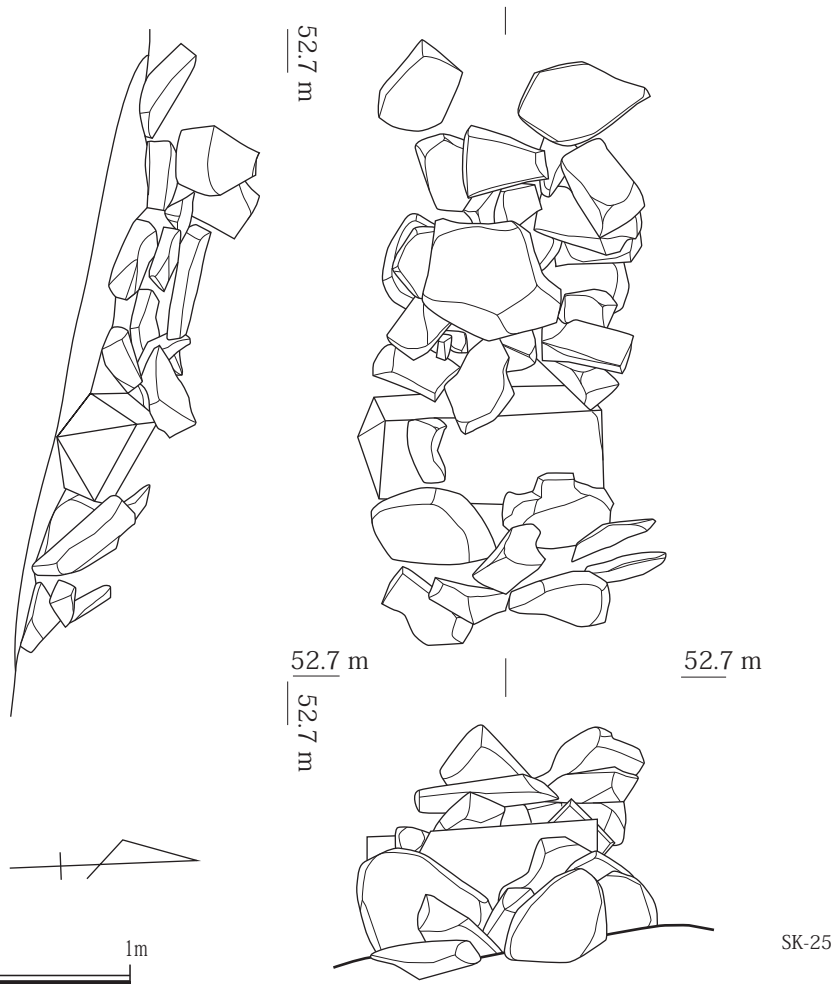
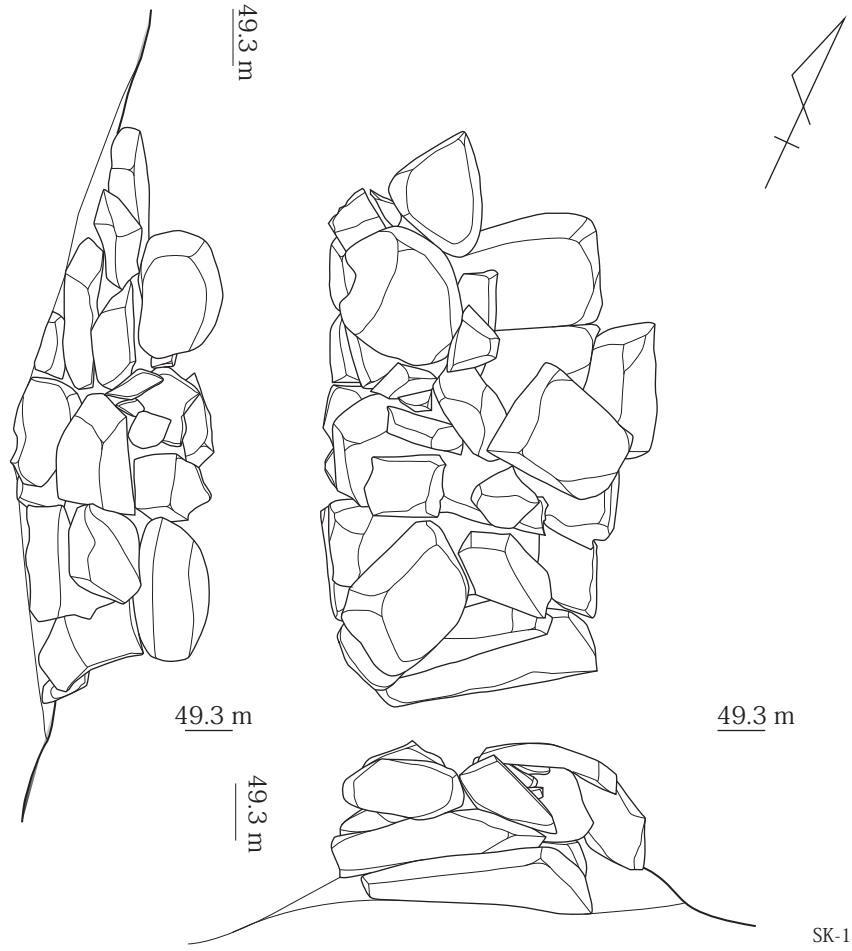
基壇状遺構は、非常に種類が多く、詳細な検討は後述するが、①自然石立碑を伴うもの、②整形立碑を伴うもの、③上部構造を伴わない1段石列配置のもの、④石組みを3段以上組み上げるものの4種類が存在している。

Ⅲ区にいたるまでの通路には、玉砂利が敷かれていたり、階段状遺構には、墓地が葉却され、魂抜きをした墓塔の基礎など方形部材が再利用されるなど、大量の墓塔が埋め込まれている。

なお、章末の表2-3に掲載した調査区外と分類した塔の一部は、本区より北側の斜面谷部へ落下したものと想定している。なお基壇状遺構については、崩落し、現状が不明瞭なものについては総基数より除外している。

Ⅳ区

Ⅳ区はⅢ区下段、同標高の47m～40mに位置し、谷部に向かって細長伸びるテラス状の区画を掘削して平坦面を造成し、通路を挟んで南・北側に造営されている。Ⅳ-1から10までが安置されている上段は、東西7m×南北4m、通路を整備した後に、平坦面を形成している。また下段は、通路整備時に尾根部を大規模掘削し、通路を整備しとた後に通路の左右に東西16m×南北2mの造成面を造り、墓地を安置している。明らかな意図を持って整備しているⅣ区の上段は、造成区画面にそう形で墓塔が配列されているが、下段については、通路整備後、限



第9図 SK-19、25 実測図 (1/80)

定された平坦面に、不規則に並べられている。

Ⅳ区には 22 基の立碑を確認した。これらの立碑は、造営当初よりも後世に造られたものが集中している。他の地区と異なるのは、立碑がほとんど倒されており、基礎、基壇も原位置を留めていない点である。これが、自然災害なのか人為的な状況なのかは不明な点が多いが、塔身部も破壊されていることから、閉眼法要のために破壊されたものではないかと想定している。

V区

V区は、調査区最下段、標高 42.5m ~ 35m に位置し、尾根頂部を挟むようにして、崎津共同墓地の背後に向かって細長く伸びる斜面南側のテラス状区画、東西 15.0m × 南北 4.0 m と、斜面北側の東西 10.0m × 南北 2 m の 2 段構造の区画に分かれる。

斜面南側の区画は、現代のブロック積みによる区画があること、昭和年間の墓塔があることから、現代に 1 度改修が行われている。斜面北側は、石積みにより、区画が上・下段に分かれている。両地区ともに、規格的に墓地が配列されていること、方柱型の石材により、区画を設けていることから、「イエ」の概念を有した墓域として整備されたのではないかと考えられる。

V区には、27 基の立碑を確認し、1 基の基壇状遺構を確認した。墓塔については、19 世紀から 20 世紀の所産がほとんどではあるが、中でも、V区南側斜面には、調査区最古の寛延 2 (1749) 年銘塔や、最古級の寛延四 (1751) 年銘塔が存在しており、現代に行われた整備以前から、墓域として利用していたことが判る。なお、現代の墓塔は、ラテン語で紀年銘を陰刻した塔や、かな文字や十字架を刻む塔も存在している。これらは、すべて崎津教会の方角を向っていることが注目される。また、基壇状遺構は上部構造として立碑を伴うものであった。この立碑は、紀年銘から文政十一 (1828) 年の所産であり、おおよそ 19 世紀を前後する段階で、築造されていると想定している。

3 基壇状遺構 (第 7・8・9・10 図)

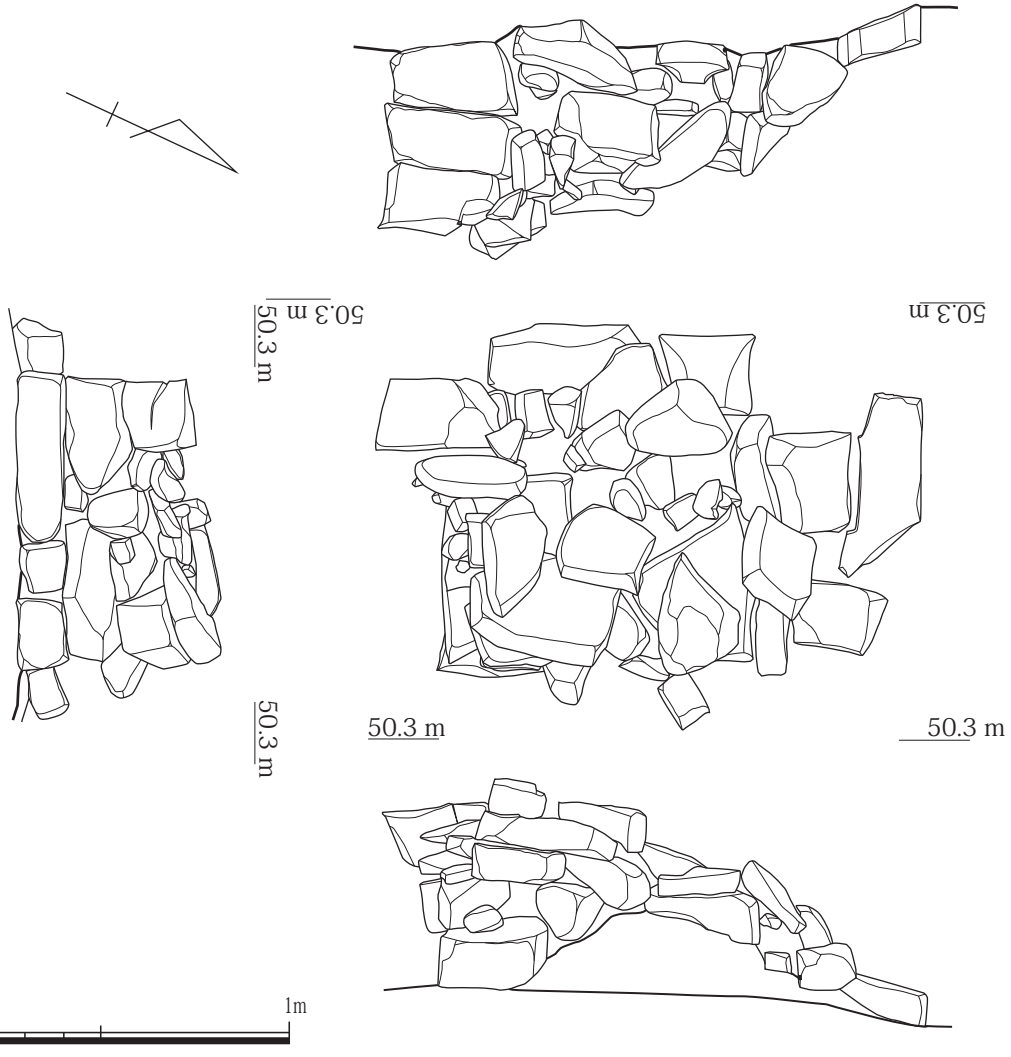
本調査では、呼称する基壇状遺構は、上部構造の有無を除けば、Ⅰ～Ⅲの類型に分けられる。Ⅰ類は自然石を 6 段積み上げているもの、Ⅱ類を自然石を 3 ~ 4 段積み上げているもの、Ⅲ類石列配置のものに大別している。今回は、良好な状態で残存しているもの、すでに閉眼法要が終了したため破壊され、記録が早急に必要なもののみを掲載している。

なお基壇状遺構は、地山にドーム状の盛土をする、あるいは地山を掘削しドーム状にした後、その周りに基壇を積み上げている。そのため、内部が中空になっているものがほとんどである。

SK-1(第 7 図)

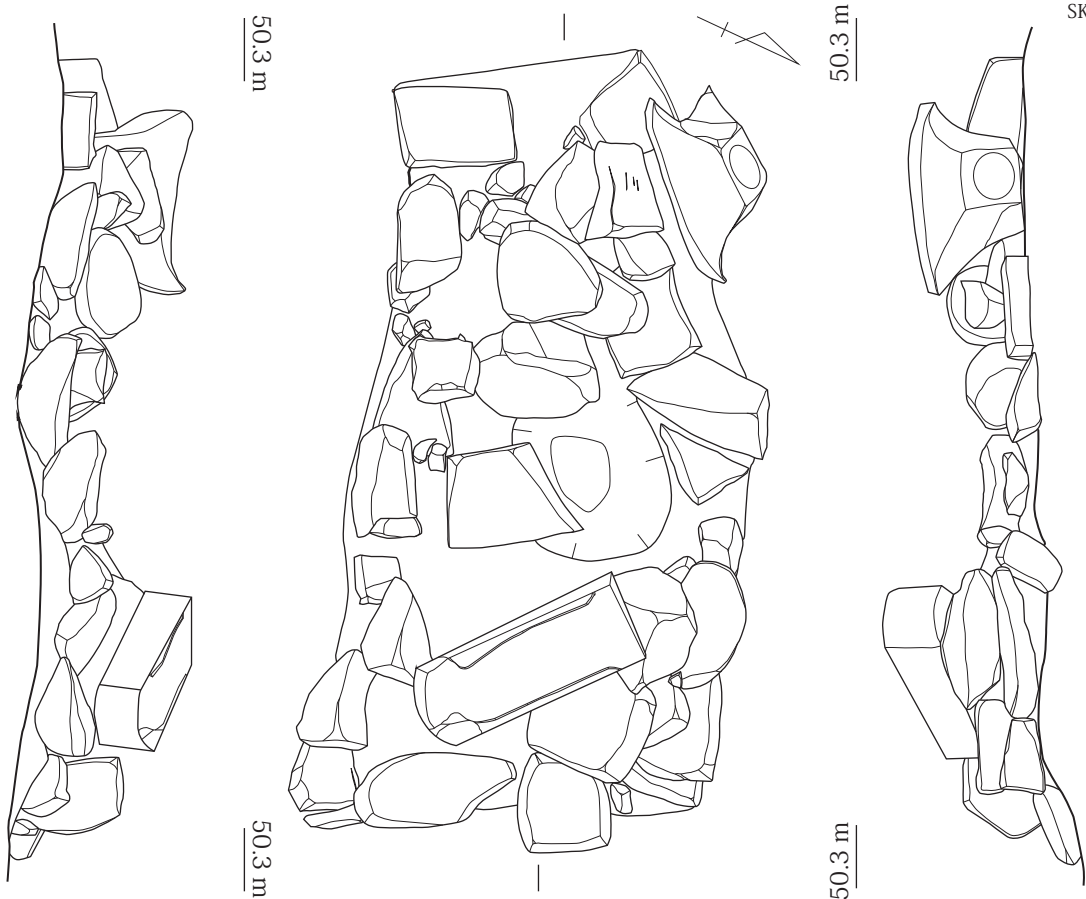
調査区Ⅱ区のなかでも最上段、標高約 52.8m に位置しており、南北 1.6 × 東西 1.3m、高さ 0.7m の方形の基壇状遺構である。基部は、倒壊により当時の状態を保てていないが、残存状況から、おおよそ 4 段積の基壇状であったと考えられる。上部構造として、平滑な自然石を中央に配置することで、墓塔としてのモニュメントの代替としている。この石材は、基壇状遺構を形成している自然石 (山石) とは異なり、海浜部に散布している円礫を配置する点は、近代におけるキリシタンの埋葬方法と共通する所がある。

SK-17



崎津古墓

SK-18



第10图 SK-17、18 实测图 (1/80)

なお、SK-1 の内部構造については、地山を長形状のドームに掘削し、整備したのち、その周りに自然石を方形に配列し、4 段積みで基壇を形成している。中空部分については、1～2 cm 程度の玉砂利、5cm 程度の自然石を入れ込むことで壊れないような構造を呈している。

SK-10(第 8 図)

調査区Ⅲ区の斜面南側、標高 51.8 m に位置している。段切造成を行った平坦面の段にはめ込むように配列している。南北 0.6. × 東西 0.5 m、高さ 0.3m を測る。地山を掘削することで、方形状のドームを造りだし、プランに沿うように自然石を配列している。自然石は、4 段積みの基壇状遺構である。上部構造として、平滑な自然石を中央に配置することで、墓塔としてのモニュメントの代替としている。また、基壇状遺構の上面中心には、海浜部に散布している円礫を配置している。なお、SK-10 内からは、紅皿 2 枚が出土しているが、これは基壇状遺構の石組みの隙間から埋葬されたものである。

SK-12(第 7 図)

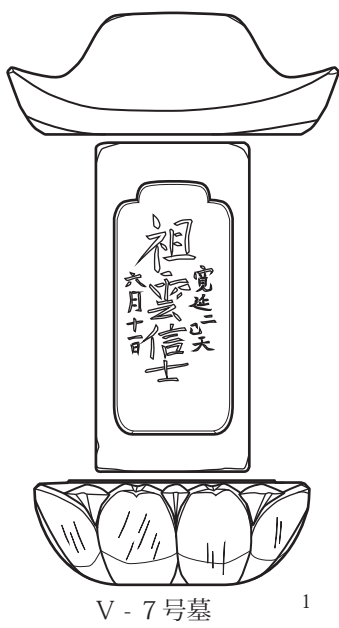
調査区Ⅲ区の中央に位置し、標高 51.3 m に位置している。基部及び上部構造が崩落しているため、築造当時の様相を呈していない。南北 10.9 × 0.9 m、高さ 0.4m を測る。内部構造から、地山に盛土を行い、正形状のドームを造りだし、このプランに沿うように自然石を配列している。周辺には、自然石が散逸していることから、SK-12 を構成する石材であったことが考えられる。また東側立面の残存状態から、おおよそ 4 段積の基壇状遺構であったと想定している。上部構造は、立碑や円礫などは確認できてはいないが、盛土部分より 1～2cm 程度の玉砂利を複数検出している。

SK-17 (第 10 図)

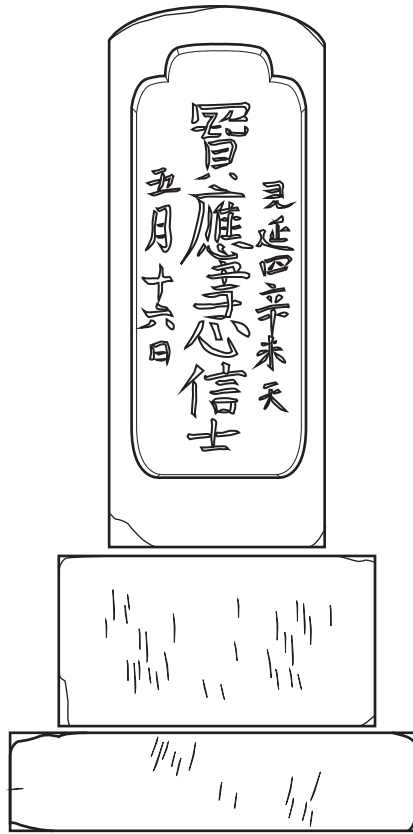
調査区Ⅳ区の中央、標高 50.3 m に位置しており、遺構は良好な形で現存し、南北 1.5 × 東西 1.0m、高さ 0.6m を測る。地山を掘削することで、方形のドームを造りだし、このプランに沿うように自然石を配列している。自然石は、3 段積みの基壇状遺構で、その内部は、1～2 cm 程度の玉砂利、5cm 程度の自然石を入れ込み構築している。上部構造は、有しておらず、構築年代は不明である。ただし、参拝用の拜石として、北側に平滑な石材を埋め込んでいる。なお、SK-17 内からは、紅皿 2 枚が出土しているが、これは基壇状遺構の石組みの隙間から埋葬されたものである。

SK-18(第 10 図)

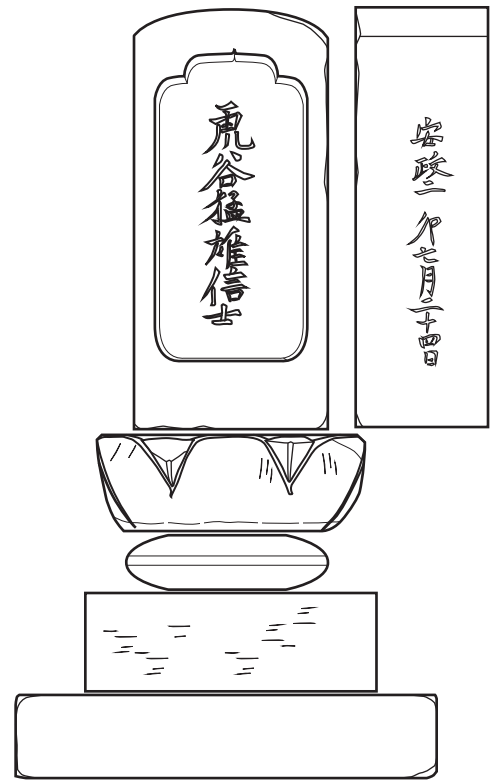
調査区Ⅳ区の北側に位置し、標高 50.3m に位置している。遺構は、当時の状態を留めておらず、地下も掘下げによるカクランを確認した。基壇状遺構は南北 1.0 × 東西 2.0m、高さ 0.3m、地下遺構は、南北 0.4m × 東西 0.5 m、深さ 0.4m を測る。現状より 1 段列石の基壇状遺構で、上部構造は伴うが、紀年銘が無いため年代は不明である。地下は後世のカクランであるが、難のために掘りかえたのかは不明で、埋葬方法から考えると、墓坑と認定するのは難しいと考える。なお SK-18 内からは、紅皿片 1 枚を検出した。



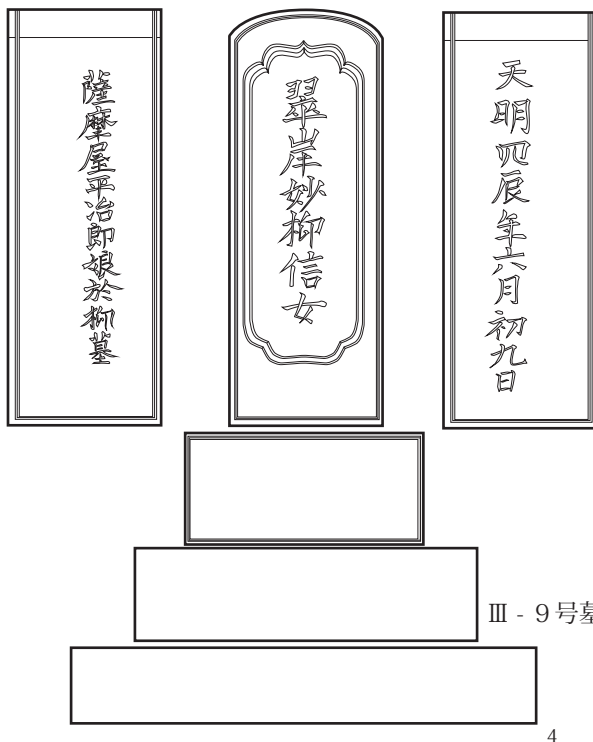
V - 7 号墓



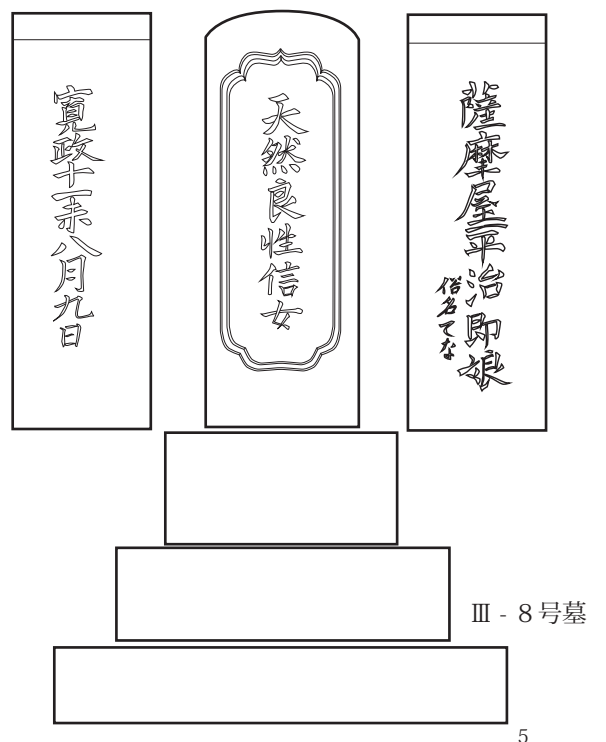
V - 11 号墓



IV - 22 号墓



III - 9 号墓



III - 8 号墓

第 11 图 近世墓塔実測图① (1/10、1/20)

SK-19(第9図)

調査区Ⅳ区の北側に位置し、標高 49.3m に位置しており、遺構は、良好な形で現存しており、南北 1.5 × 東西 0.6m、高さ 0.4m を測る。内部構造から、地山に盛土を行い、正方形プラン状のドームを造りだし、このプランに沿うように自然石を配列している。現状より 3 段積みの基壇状遺構であったと考えられる。上部構造は無く、周辺に立碑や円礫などは散逸していない。なお盛土部分より 1 ～ 2cm 程度の玉砂利を複数検出している。

SK-22 (第8図)

調査区Ⅳ区の中央、標高 50.0 m に位置しており、調査区内では最大規模の基壇状遺構である。遺構は良好な形で現存し、南北 1.7 × 東西 0.95m、高さ 1.0m を測る。地山を掘削することで、方形プラン状のドームを造りだし、プランに沿うように自然石を配列している。自然石は、6 段積みの基壇状遺構で、内部は、1 ～ 2 cm 程度の玉砂利、5cm 程度の自然石を入れ込むことで構築している。上部構造は、立碑を安置しているが、紀年銘は確認できず、年代は不明である。なお、SK-22 内からは、紅皿 2 枚、寛永通宝 1 枚が出土しているが、これは基壇状遺構の石組みの隙間から埋葬されたものである。

SK-25 (第9図)

調査区Ⅱ区の斜面南側、標高 52.7 m に位置しており、遺構は斜面地に築かれ手いることもあり、半壊している。南北 0.6 × 東西 1.2m、高さ 0.4m を測る。地山は掘削せず、中央に半球状のドームも造りだしておらず、斜面に自然石を積み上げている。自然石は、半壊しているためおそらくは 3 段積みの基壇状遺構で、内部は 5cm 程度の自然石を入れ込むことで構築している。上部構造は、立碑を安置しているが、紀年銘は確認できず、年代は不明である。

4 立碑 (第11図、第12図)

本調査区において、現状 170 基の立碑が確認されている。大別すると、①位牌型、②笠塔婆型(装飾無)、③笠塔婆(装飾有)に分かれる。さらに塔身部内の区画についても A.1 段隅丸方形区画、B.2 段隅丸方形区画、C. 上端宝珠型・下端 1 段隅丸方形区画、D. 上端宝珠型・下端 2 段隅丸方形区画、E. 宝珠型区画に分かれる。なお、石材はすべて砂岩製である。

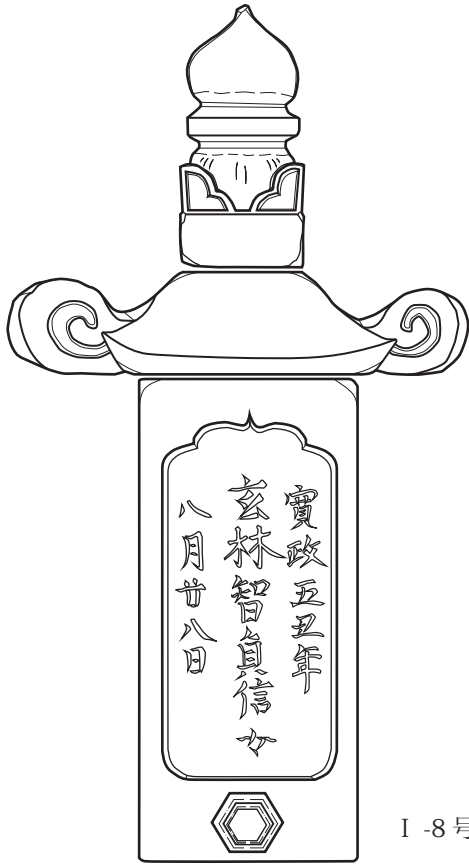
第11図

第11図に掲載しているのは、調査区においても最古級・最大級のものに限定している。

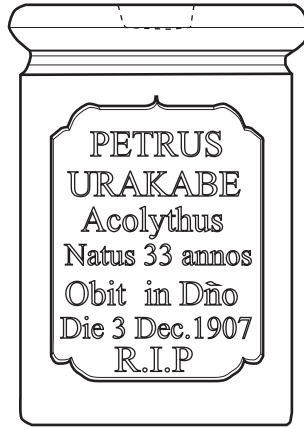
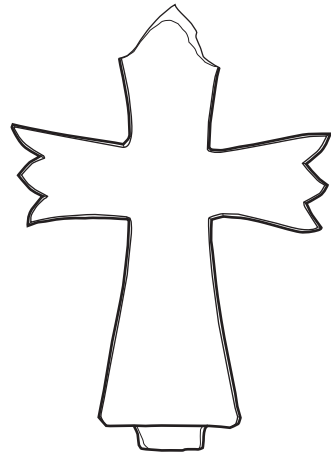
第11図-1は、調査区最古の塔で、②-C類にあたる。「寛延二(1749)己天 祖雲信士 六月十一日」「俗名辰工門」銘を刻む。紀年銘及び型式学的に、墓地造立当初の所産である。基壇、敷茄子、基礎、宝珠は逸欠しており、反花座、塔身、笠のみが現存している。

第11図-2は、①-C類にあたり、「寛延四辛未天 寶応慧信士 五月十六日」「永田勘右衛門塔」銘を刻む。調査区最古級の塔で、紀年銘及び型式学的に、墓地造立当初の完形塔である。

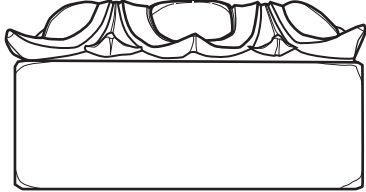
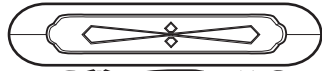
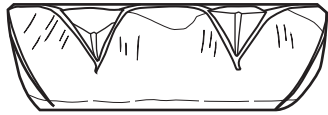
第11図-3は、①-C類にあたり、「角谷猛雄信士」「安政二卯七月二十四日」銘を刻む。調査区においては、最古級である完形塔である。



I-8号墓



V-23号墓



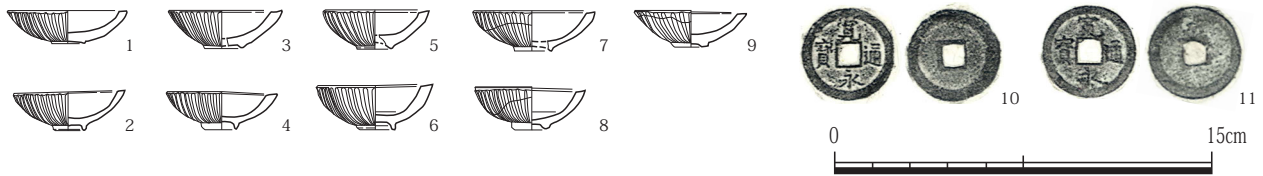
7



6



第12图 近世墓塔实测图① (1/10)



第13図 崎津古墓出土遺物実測図(1/3)

表1 崎津古墓出土遺計測表

| 指図番号 | 資料名 | 形態 | 出土遺構 | 材質 | 法量 | | | 焼成 | 胎土 | 色調 | 備考 |
|------|------|-----|--------|----|---------|---------|--------|----|----|--------------|--------|
| | | | | | 最大高(mm) | 最大幅(mm) | 底径(mm) | | | | |
| 1 | 紅皿 | 貝殻状 | IV-7号墓 | 磁器 | 13 | 48 | 15 | 良好 | 良 | 明白色の胎土に青白色の釉 | 完形 |
| 2 | 紅皿 | 貝殻状 | IV-7号墓 | 磁器 | 15 | 44 | 12 | 良好 | 良 | 明白色の胎土に青白色の釉 | 1/2残存 |
| 3 | 紅皿 | 貝殻状 | SK-10 | 磁器 | 15 | 42 | 12 | 良好 | 良 | 明白色の胎土、無釉 | 2/3残存 |
| 4 | 紅皿 | 貝殻状 | SK-10 | 磁器 | 18 | 46 | 16 | 良好 | 良 | 明白色の胎土に青灰色の釉 | 完形 |
| 5 | 紅皿 | 貝殻状 | SK-17 | 磁器 | 15 | 45 | 15 | 良好 | 良 | 明白色の胎土に白色の釉 | 1/4残存 |
| 6 | 紅皿 | 貝殻状 | SK-17 | 磁器 | 16 | 44 | 14 | 良好 | 良 | 明白色の胎土に白色の釉 | 完形 |
| 7 | 紅皿 | 貝殻状 | SK-22 | 磁器 | 16 | 51 | 16 | 良好 | 良 | 明白色の胎土に青白色の釉 | 1/2残存 |
| 8 | 紅皿 | 貝殻状 | SK-22 | 磁器 | 17 | 45 | 15 | 良好 | 良 | 明白色の胎土に白色の釉 | 完形 |
| 9 | 紅皿 | 貝殻状 | SK-18 | 磁器 | 14 | 48 | 14 | 良好 | 良 | 明白色の胎土に青灰色の釉 | 完形 |
| 10 | 寛永通寶 | - | SK-22 | 銅 | 24.5 | 24.5 | 厚1.5 | - | - | 暗灰色 | 重量2.9g |
| 11 | 寛永通寶 | - | I-8号墓 | 銅 | 24.5 | 24.5 | 厚1 | - | - | 暗灰色 | 重量3.5g |

第11図-4は、①-D類にあたり、「翠岸妙柳信女」、「天明四辰年 六月初九日」、「薩摩屋平治郎娘 於柳墓」銘を刻む。調査区最大級の塔で、全高1.9mを測る。同型式の第11図-5についても、①-D類にあたり、「天然良性信女」、「寛政十一未 八月九日」、「薩摩屋平治郎娘 俗名てな」銘を刻む。

第11図-4同様、調査区最大級の塔で、全高1.85mを測る。両塔の紀年銘から「薩摩屋」という屋号が確認できるが、これは古くより崎津の貿易関係で財を得た家系である。

第12図-6は、③-C類にあたり、「寛政五丑年玄林智貞信女 八月廿八日」銘を刻む。塔身には紀年銘以外にも六角形の陰刻施し家紋を表している。調査区内の立碑の中でも、笠部四隅の雲気文や敷茄子など装飾が多い。なお基壇部分には、十字の陰刻が施されていた。これは、基壇整形後に施されたものであり、制作時に付けるトンボ十字とは異なり、西洋クルス状の様相を呈しており、基礎を配置すると、隠れるように刻まれている。本塔周辺の清掃中に基礎下より、寛永通法が出土している。第12図-7は、明治40年に造られたもので、「RETRUS URAKABE A colythus N atus 33 aninos Obut in Dno Die 3Dec 1907RIP」とラテン語で陰刻されており、崎津地区でキリスト教が解禁され、公に復活した後の墓塔である。

5 出土遺物(第13図)

紅皿(1~9)

女性の紀年銘を有す立碑及び基壇状遺構より出土している。規格はほとんど統一されている。1は高さ1.3cm、口径4.8cm、底径1.5cm、2は高さ1.5cm、口径4.4cm、底径1.2cm、3は高さ1.5cm、口径4.2cm、底径1.2cm、4は高さ1.8cm、口径4.6cm、底径1.6cm、5は高さ1.5cm、口径4.5cm、底径1.5cm、6は高さ1.6cm、口径4.4cm、底径1.4cm、7は高さ1.6cm、口径5.1cm、底径1.6cm、8は高さ1.4cm、口径4.8cm、底径1.4cmを測る。ほとんどが内・外面に施釉されているが、3については、外面に施釉されていない。成形方法は、いずれも型押成形で、外面は貝殻状条痕を施し、高台をケズリ出し後、横ナデにより形成している。

寛永通法（10～11）

いずれも新寛永通宝である。10は高さ2.45cm、幅2.45cm、厚さ1.5mm、重さ2.9gを測る。11は高さ2.45cm、幅2.45cm、厚さ1.0mm、重さ3.5gを測る。

6 調査のまとめ

本調査区には、丘陵尾根を平滑に掘削した平坦面のうえに、170基の立碑と27基の基壇状遺構を確認した。調査区中央には大きな窪みがあり、その周りには自然石が散布していた。墓坑の可能性があったため、表土を除去したところ、深さ29cmであった。近接地域も含めたヒアリング結果から、「明治～昭和初期にかけて、キリシタン家系の葬送儀礼において、「埋葬の際には、とりあえず仏教式の法要を行い、100×100cm、深さ180cmの墓坑を掘り、円形の棺中に屈伸葬にて埋葬するという。法要後、家系の関係者だけ、その場に残り、座棺を斜めに傾けて埋葬し、上部には円形の列石を配置する。その列石の中央には、円礫と白い玉砂利を配置する」という。以上のことから、伸展葬、屈伸葬の墓坑ではないと判断した。

長崎県平戸市、長崎市、大分県の潜伏キリシタンが関与している墓地では、墓坑の直上に地上構造物を配置しないことから、表土の一部を除去し、基壇状遺構周辺の遺構の有無を確認したが、遺構は確認できなかった。SK-7周辺や通路の深さ2cm程度の腐葉土を除去すると、その下層から2cmの暗褐色砂質層+玉砂利層があり、その直下から地山が検出された。玉砂利は1cm程である。各地域に所在する潜伏キリシタンの墓所などでは、玉砂利を海浜部から拾い集め、毎年1度墓地周辺に敷き詰める事例がある。崎津古墓の至る所に敷かれた玉砂利が、基壇状遺構、あるいは通路に意図的に敷き詰めたものかは判断し難いが、本遺跡も潜伏期における民俗事例の一例であると判断したい。

立碑や基壇状遺構からは、紅皿が出土し、その型式から18世紀初頭～中葉の所産と判断した。墓地が造営された享保十七（1732）年とほとんど合致するものの、紅皿が出土した立碑は、紅皿よりも後世の所産であることから、紅皿自体が後世まで継承する威信財的な扱いを受けていたと考えられる。なお、紅皿が副葬されているのは、立碑の紀年銘から女性の墓にのみに限葬されており、女性の口紅容器として利用されていたという説を補強する資料となる。出土枚数は常に2枚単位であることから、今後は紅皿のセット関係についても検討が必要となる。

崎津は、潜伏キリシタンが発覚する『天草崩れ』という事件の舞台でもある。そのため地域にはキリシタンを取り調べた古文書の『宗門改帳文化二年仏像差出名前帳』『村明細享保十七年条』が残っている。詳細は、第V章に記載するが、古文書にある取調べを受けた潜伏キリシタンの名前と、立碑に刻まれた紀年銘を比較したところ、数人ではあるが、潜伏キリシタンの墓地が特定できた。つまり、崎津の潜伏キリシタンらは、この墓域で表向きは仏教徒として仏教式墓地を造り、祖先信仰を行っていたのである。キリシタン墓と特定できる墓の中に、第12図-6のクルス状十字を陰刻する立碑がある。陰刻された家紋から、この立碑が、代々キリスト教を信仰する家系であることがわかった。クルス状十字痕は、基礎を安置すると隠れるような位置に刻まれており、これが意図的にクルス十字を模したのかは不明だが、潜伏キリシタン家系の墓であることを鑑みれば、来世にまでキリシタン信仰を継承するという願いをもめ、密かに刻んだ可能性は高い。

表 2-1 崎津古墓近世墓一覧

| 地区 | 番号 | 西暦 | 銘文 | 備考 |
|-----|------|--------------|---|-----------------|
| I | 1号墓 | 1807 | 正面「師真玄雄信士」 左面「文化四卯辛 二月三日」 右面「俗名 傳次郎」 | |
| | 2号墓 | 1802 | 正面「善鏡信女之塔 享和元酉年 十二月十九日」 左面「松之助妻ナツ」 | |
| | 3号墓 | 1780 | 正面「世智芳童子 安永九年 七月廿八日」 | |
| | 4号墓 | 1807 | 正面「良光童子」 左面「石井菊次郎」 右面「文化四卯年 七月十有三日」 | |
| | 5号墓 | 1813 1833 | 正面「□□信士 智仙信女」 左面「天保四己四月廿七日」 右面「文化西三月廿日辰五郎」 | |
| | 6号墓 | 1860 1862 | 正面「空智珪信女 覺口來英童子」 左面「文久二年 市治 五月廿一日」 右面「萬延元年 申七月〇七日」 | |
| | 7号墓 | 1817 | 正面「徳藏良昌信士」 右面「文化十四年丑年」 | |
| | 8号墓 | 1793 | 正面「寛政五丑年玄林智貞信女 八月廿八日」 | 右側地石隅上に十字痕あり |
| | 9号墓 | 1783 | 正面「普光□□」 左面「源三〇卯」 右面「天明三年卯八月初五日」 | |
| | 10号墓 | 1813 | 正面「玄崎信士位」 左面「文化十有三年子 二月十日」 右面「俗名浦壁平吉」 | |
| | 11号墓 | 1776 | 正面「安永五年」 | |
| | 12号墓 | 1787 | 正面「慈月直惠信女 七月廿八日」 左面「天明七未 二月廿三日 清七」 右面「文政六未 二月廿五日 清右エ門母」 | |
| | 13号墓 | 1787 | 正面「本要源信士」 右面「天明七未年 二月廿五日」 | |
| | 14号墓 | 1800 | 正面「超雲了格信士之塔 寛政十二申年 三月二十四日」 | |
| | 15号墓 | 1813 | 正面「無外宗徳信士墓」 右面「文化十酉 十二月廿四日 俗名浦壁新蔵」 | 墓塔花燈上部に六角形の家紋有り |
| II | 1号墓 | 1789 | 正面「寛政元年梅峰信士墓 十二月廿日」 正面「□□□□」 | |
| | 2号墓 | - | 左面「久次良」 | |
| | 3号墓 | 1788 | 正面「嘉岩良啓信士」 左面「福田民壽経」 右面「天明八申年十月初三日」 | |
| | 4号墓 | - | 正面「□□□□」 左面「惣太郎」 | |
| | 5号墓 | - | 正面「二年月即往信士二月十日」 左面「惣太郎」 | |
| III | 1号墓 | 1766 | 正面「明和三酉年 慧薫信女 十二月廿六日」 右面「源兵衛 母」 | |
| | 2号墓 | 1779 | 正面「安永八年亥年 寛光童女 六月廿六日」 左面「俗名 ゆく」 | |
| | 3号墓 | 1766 | 正面「慧薫信女 明和三酉年 十二月廿六日」 左面「一絲兵口母」 | |
| | 4号墓 | 1831 1834 | 正面「清口良阿信士 徳仙良意信士」 右面「天保五年2月廿九日同清治郎」 左面「天保二年 三月十八日」 | |
| | 5号墓 | 1838 | 正面「妙恭信女」 左面「天保戌年 俗名 未八月7日 ゆや」 | |
| | 6号墓 | 1790 | 正面「水月童子 寛正二年戌年 九月十四日」 右面「良順童女 天明元丑紀 二月十五日」 左面「幻翠童女 天明四辰年 六月初五日」 | |
| | 7号墓 | - | 正面「覺先了天信士」 左面「俗性 右井源三郎」 | |
| | 8号墓 | 1799 | 正面「天然良性信女」 右面「寛政十一未 八月九日」 左面「薩摩屋平治郎娘 俗名てな」 | |
| | 9号墓 | 1784 | 正面「翠岸妙柳信女」 右面「天明四辰年 六月初九日」 左面「薩摩屋平治郎娘 於柳墓」 | |
| | 10号墓 | - | 正面「■■居士」 | |
| | 11号墓 | - | 正面「■■居士」 | |
| | 12号墓 | 1766 | 正面「空善青信士 明和三年 四月廿九日」 右面「俗名平兵衛」 | |
| | 13号墓 | 1821 | 正面「浄口泰安信女」「文政四歳 くハ 己十一月四 女房」 | |
| | 14号墓 | 1768 | 正面「慧盛信女位 明和五子年 四月廿日」 | |
| | 15号墓 | 1837 | 正面「□然妙性信女位」 左面「天保酉十二月三日」 | |
| | 16号墓 | - | 正面「■■貝迷信士 ■■酉年■■十八日」 左面「吉田兼平變」 | |
| | 17号墓 | - | 正面「□道松信士 □□戌天 □月廿六日」 | |
| | 18号墓 | 1801 | 正面「一叟了心信士墓」 右面「享和元酉年 三月十七日」 | |
| | 19号墓 | - | 正面「圓至貫祖信女」 右面「二人七 母」 | |
| | 20号墓 | 1756 | 正面「宝曆六丙子 林雲□□ 信士 九月五日」 | |
| | 21号墓 | 1784 | 正面「兼信士 天明四辰年 五月十三日」 | |

表 2-2 崎津古墓近世墓一覽

| | | | | | |
|------|------|--------------|--|--|--|
| IV | 1号墓 | 1855 1824 | 右面「安政二卯正月十六日 梅治郎養父 寅松」 左面「文政七甲八月十七日 又治朗曼」 | | |
| | 2号墓 | | 正面「六月九日 俗名由三」 正面「慧戒信女」 | | |
| | 3号墓 | 1765 | 右面「明和二酉年」 左面「十二月〇日興三衛門母」 | | |
| | 4号墓 | 1801 | 正面「精林智徳信女墓」 右面「享和元酉年 三月二十九日」 左面「吉田伊興七 妻」 | | |
| | 5号墓 | 1789 | 正面「坂窓妙白大姉」 右面「寛政元酉夫」 左面「八月十一日」 | | |
| | 6号墓 | 1765 | 正面「慈光信女 明和二酉年 五月廿三日」 正面「瑞窓妙坂大姉塔」 | | |
| | 7号墓 | 1810 | 右面「文化七丑 閏八月十七日」 左面「吉田伊興七 姉」 | | |
| | 8号墓 | | 正面「雨法壽心信士」 右面「俗名 虎杏」 | | |
| | 9号墓 | — | 正面「□□信□」 | | |
| | 10号墓 | 1766 | 正面「明和三年 坂一善□信士 戊正月二十四日」 | | |
| | 11号墓 | 1802 | 正面「享和二戌年正月廿二日 場舎信士 篤迎信女各位 享和二戌年二月十日」 | | |
| | 12号墓 | — | 正面「□□□信女 □□癸酉夫」 | | |
| | 13号墓 | 不明 | 正面「□□□信女 □□□酉」 | | |
| | 14号墓 | 1802 | 正面「久岳智遠信女 四□法財信女」 右面「享和二戌二月十四日 福田道夫 母」 左面「幻法童子 文化六巳正月廿七日」 | | |
| | 15号墓 | 1749 | 正面「徳岩道光信士 寛延巳 十二月■■■」 左面「内崎陽人也」 | | |
| | 16号墓 | — | 正面「□勝信女 宝暦六年」 正面「得明信士 文化十酉五月廿三日 坂真宗高信士位 文政六未二月十八日」 | | |
| | 17号墓 | 1813 | 右面「寶山信士位 天保五年」 左面「得謬信士 文化十酉二月二日 洞雲信士位」 | | |
| | 18号墓 | — | 正面「妙女信女」 | | |
| | 19号墓 | 1798 | 正面「實國良相信士 真安良光信女」 右面「池上鳥松 父母 寛政十年十一月廿八日」 | | |
| | 20号墓 | 1850 | 正面「空齋白信士位」 右面「嘉永三戌 十二月十七日」 | | |
| | 21号墓 | 1845 | 正面「妙休信女」 左面「弘化二年巳 三月十七日 俗名 志かん」 | | |
| | 22号墓 | 1855 | 正面「角谷猛雄信士」 右面「安政二卯七月二十四日」 | | |
| | 1号墓 | 1802 | 享和二戌年 正月十二日 死亡 | | |
| | V | 2号墓 | 1874 | 正面「ヘートロ □□□□墓 □□□□」 右面「立之幾次」 左面「明治七年二月十三日」 | |
| | | 3号墓 | 1914 1917 1919 1929 | 正面「ヘートロ マリア ミカエル」 右面「昭和四年八月十二日建主出崎新吉」 左面「大正八年四月二十一日死亡出崎新造七十四才／大正六年一月十三日死亡同トシ 六十才／大正三年六月十八日死亡／孫 敬重一才」 | |
| | | 4号墓 | 1940 1932 | 正面「マナマリヤ マルコ カタリヤ 出崎カヨ 新吉之墓 トク」 右面「カラ昭和七年六月十七日」 左面「新吉 昭和十四年六月廿四日／トク昭和 十五年十月十三日」 | |
| | | 5号墓 | 1911 | 正面「ヤママリヤ出崎ヨシ」 右面「ヘートロ 出崎寅吉 ベートロ 石川八十市」 左面「マリヤ出崎ユキ 明治四十四年六月十日 之立」 | |
| 6号墓 | | 1898 | 正面「マリヤオイセ † ベートロ幾太郎」 右面「明治卅一年 五月十日立才トチ デジヤキオツシ」 | | |
| 7号墓 | | 1749 | 正面「寛延二己天 祖雲信士 六月十一日」 左面「俗名辰エ門」 | 最古 | |
| 8号墓 | | — | 正面「(剝離)」 | | |
| 9号墓 | | 1783 | 正面「天明三卯七月廿日 又入定 天明三卯七月廿三日 又入七」 | | |
| 10号墓 | | 1754 | 正面「宝暦四甲戌天 遍安宗運位□塔 十二月二十」 | | |
| 11号墓 | | 1751 | 正面「寛延四辛未天 寶応慧信士 五月十六日」 左面「永田勘右衛門塔」 | | |
| 12号墓 | | | 正面「玄浄道信士 玄乘信士」 | | |
| 13号墓 | | 1765 | 正面「明和二歳 早世定充童千位 七月四日」 左面「俗名丑三良」 | | |
| 14号墓 | | 1801 | 正面「南齋宗壽信士 心巖淨照信士」□ 右面「享和元酉年 三月廿八日 初右衛門 実子力秀」 左面「同四月初四日 同人妻初」 | | |
| 15号墓 | | 1795 | 正面「寛政七年 歸真元浄信 卯二月朔日」 右面「善吉」 | | |
| 16号墓 | | 1784 | 正面「天明四辰年 豊林信女位 潤正月十八日」 側面「丑三嫁」 | | |
| 17号墓 | | 1898 1899 | 正面「寶山自宅信士」 右面「明治三十二年四月三日立主 中舖峰松父 八十才 五十九才」 左面「人ユ三十一年八月二十九日 秋月童子光助」 | | |
| 18号墓 | | 1822 | 正面「良開信士 潮海妙音信女 冷光信女」 右面「良 萬延元申十二月十八日 潮 明治二己九月廿九日 冷 文政五年七月十九日」 左面「竹篠 ■左とキ左はつ」 | | |
| 19号墓 | | 1905 1906 | 正面「清室信女」 右面「人ユ三十八年十二月十四日團次 早世明悟孫兒 立主峰松」 | | |
| 20号墓 | | 1787 | 正面「哲印信士 玄珠信女」 右面「幸右エ門 天明七〇正月六日」 左面「寛政五丑十一月十三日 同女房文」 | | |
| 21号墓 | | 1922 | 正面「ヘートロ浦壁保夫 † 光義墓 保」 右面「大正十一年旧九月五日 寅吉三男」 | | |
| 22号墓 | | 1879 | 正面「浦壁八十松 マリヤ 人ユムメ」 右面「明治十二年旧八月八日 寅吉父 四十六才」 左面「大正六年旧十一月十九日亡 人ユ母 七十二才」 | | |
| 23号墓 | | 1907 | 正面「RETRUS URAKABE Acolythus Natus 33 aninos Obut in Dno Die 3Dec 1907RIP」 R. I. P. Requiescat in Pace Rest in Peace (英) | | |
| 24号墓 | | 1763 | 右面「明治四十年 十二月二日掃天 ベートロ浦壁伊之造 三十三年」 | | |
| 26号墓 | | 1828 | 正面「宝暦十三年 定然童子 七月十日」 正面「早世 秋夢童女」 右面「俗名由之」 | | |
| 27号墓 | | 1819 | 左面「文政十一年 了八月六日」 正面「文政十二年 淨霖信女 俗名 丑五月廿日 てふ」 左面「文政二年 坂本清江信士 俗名 四月廿四日 清四郎」 | | |

表 2-3 崎津古墓近世墓一覧

| | | | | |
|----------|------|--|--|--|
| 調査区外 | 1号墓 | 1907 | 正面「大源祖通信士」 右面「明治四十年十一月六日 婦天 吉村徳次父 俗名半次郎八十六才 建立者吉村シカノ」 | |
| | 2号墓 | 1842 | 正面「徳雲宗澤信士 善室妙藏信女」 | |
| | | 1843 | 右面「天保十三寅五月三日 たつ」 左面「幸右エ門 天保十四卯閏九月廿四日」 | |
| | 3号墓 | 1834 | 正面「天保五年 海光浄天信士 牛十二月九日」 | |
| | | | 左面「俗名 吉治郎」 | |
| | 4号墓 | 1866 | 正面「直指全信心士 飯元真光実如信女 天中妙藏信女」 | |
| | | | 左面「明治十六年四月廿六日 半二良妻」 右面「飯 明治三年旧十二月十七日 吉村注エ門 慶應二年十月廿四日 人工 タネ」 | |
| | 5号墓 | 1870 | 正面「明治三年三月二日没 幻光童子 浦壁伝三改」 | |
| | 6号墓 | - | 正面「口浄信口口」 | |
| | 7号墓 | - | 正面「廣覺浄園信士位」 | |
| | 8号墓 | 1855 | 正面「観山常念信女位」 | |
| | | | 右面「安政五年八月二日」 | |
| | 9号墓 | 1883 | 正面「飯命秋証誓信士 早世善智童子」 | |
| | | | 左面「明治十六年十一月十八日 松田伊与吉フ」 | |
| | 10号墓 | 1814 | 正面「覺林眞浄信女」 | |
| | | | 右面「文化十一戌六月十九日 伊平娘」 | |
| | 11号墓 | 1834 | 正面「大安長道信士 玉室妙香信女」 | |
| | | | 右面「天保五年三月八日」 | |
| | 12号墓 | - | - | |
| | 13号墓 | - | 正面「口元口 覚峰信士 三月廿 霊位 春曉信女 十月五日」 | |
| | | | 右面「口年三月廿三日 春光信口」 | |
| | | | 左面「同二月八日 道活信士」 | |
| | 14号墓 | - | 正面「口年 慧口十信女 八月十一日」 | |
| | | | 右面「口娘」 | |
| | 15号墓 | 1822 | 正面「大道儀然信士 妙弥信女」 | |
| | | | 右面「天保六未二月朔日 俗名伊平」 | |
| | | | 左面「文政五年十月三日 寅治良 くま 母」 | |
| | 16号墓 | 1786 | 右面「天明六年十一月六日」 | |
| 左面「幸十郎娘」 | | | | |
| 17号墓 | 1795 | 正面「寛政七卯年 妙鎮信女 十二月六日」 | | |
| | | 左面「俗名 由太郎 母」 | | |
| 18号墓 | 1779 | 正面「安永八亥年 十洲信士口 正月六日」 | | |
| | | 左面「俗名 由平 叟」 | | |
| 19号墓 | 1768 | 正面「善知信士」 | | |
| | | 左面「幸十郎 明和五子六月廿9日」 | | |
| 20号墓 | 1908 | 正面「マリヤ 松津トラ墓」 | | |
| | | 右面「明治四十一年十二月三十日」 左面「立之出崎幾次」 | | |
| 21号墓 | 1900 | 正面「平登露一字大五郎」 | | |
| | | 右面「明治三十三年死亡 八月二十六日 出崎行次」 | | |
| 22号墓 | 1845 | 正面「聖名ヘトロ 俗名池上犬太良 「聖名マリヤ 俗名ヲキ」 | | |
| | | 右面「御主降生後千八百四十五年年号不詳旧六月三日死去」 | | |
| | | 左面「御主降生後千八百七十二年 明治五年旧六月十二日死去」 | | |
| 23号墓 | 1886 | 正面「飯漁海信士位」 | | |
| | | 右面「明治十九善次良フ 戌八月廿二日五十二才」 | | |
| 24号墓 | 1920 | 正面「大心自徳居士」 | | |
| | | 右面「大正九年十二月六日 旧十月廿六日 俗名吉村徳治 行年五十九歳」 | | |
| 25号墓 | 1870 | 正面「直指全信心士 飯元真光実如信女 天中妙藏信女」 | | |
| | | 右面「明治三年旧十二月十七日 吉村注エ門 慶應二年十月廿四日 人工タネ」 左面「口治十六年旧五月廿六日 半二良妻」 | | |
| 26号墓 | 1881 | 正面「飯源妙愛信女位」 | | |
| | | 左面「明治十四年 十二月十七日 吉村嘉之次母 ヤス六十二才」 | | |
| 27号墓 | 1800 | 正面「寛政十二年辰 善眼有力信士 九月十八日」 | | |
| | | 左面「長六 父 俗名 儀平」 | | |
| 28号墓 | 1813 | 正面「宗秀信士 口浄信女」 | | |
| | | 右面「宗傳信士 早光童子」 左面「文化十四 三月二十六日 俗名幸■ 文化十四年 二月十七日 同人妻 俗名ふく」 | | |

IV 集落内のキリシタン遺物について

1 はじめに

大航海時代、フランシスコ・ザビエルによって西欧から日本に伝えられたキリスト教。これらは、日本古来の宗教・文化との交流を通じて、民衆に浸透し、日本では西洋文化が花開く。その後、幕府によりキリスト教が禁止され、約 250 年もの間、密かに信仰は継続され、地域に土着することで、独自の民俗風習・伝統を形成する。禁止が政府によって解かれると、それまでの苦難を乗り越え根強い信仰へと発展し、信仰の自由を得た信徒たちは、各地に教会堂を建設する。この歴史を有す世界文化遺産候補「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（以下、長崎の教会群）。その構成資産である「天草の崎津集落」（以下、崎津集落とする）は、16 世紀より港湾が整備され、漁村として栄えた集落である。また、キリスト教の布教、禁教期の弾圧・潜伏、明治期の復活に至るまでの日本のキリスト教信仰の歴史的プロセスを表している。なかでも、崎津は、弾圧・潜伏の歴史が注目されており、長崎の教会群の構成資産としても、禁教期における仏教・神道・キリスト教が混在する潜伏キリシタンの「集落」として価値を担保している。しかしながら、崎津はキリスト教布教の中心地域でもあり、実際に集落に、布教時の痕跡が“もの”として現存している。

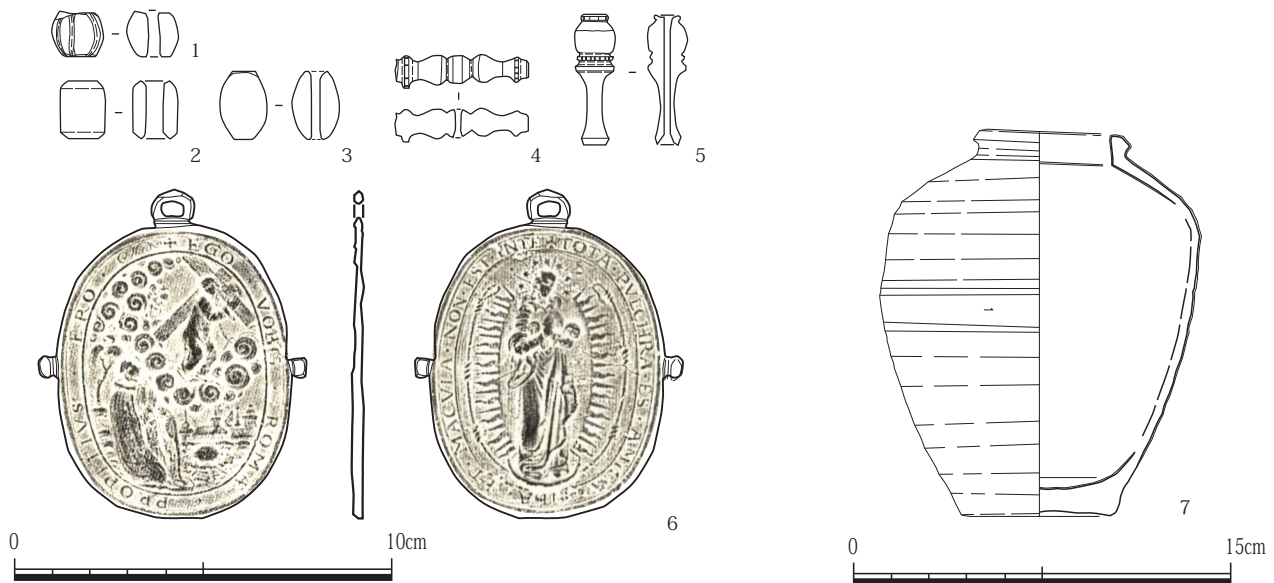
天草におけるキリスト教の伝来は、永禄 9 年（1566）に志岐鎮経がイエズス会を招来したことからはじまる。イエズス会宣教師ルイス・フロイスの『日本史』によれば、イエズス会への接近は、ポルトガル船との貿易による利潤の獲得にあった。当時のキリスト教布教は、ポルトガル船による南蛮貿易と密接な関係にあったため、貿易拠点となっていた九州の西海地域で、南蛮船の入港のために宣教師を自領に招き、布教を求める領主が相次いだ。ほどなくして、天草五人衆のうち河内浦を居城とする天草氏も交易を望み、永禄 12 年（1569）、イエズス会のルイス・デ・アルメイダによる布教が開始された。天草氏は将来の南蛮貿易を見越して、河内浦に近い崎津港にアルメイダを案内していたという。フロイスの記録によると、

人々はさっそく彼に一寒村で崎津 Saxinoccu という港を見せ、同時にその港の上の山も見せた。殿が言ったように、そこは、商品や船舶や商人の安全をはかるため、一城を築き得るところであった。

とある。天草下島の羊角湾口に位置する崎津・今富地区と、湾奥の河内浦は、キリシタン布教の一大中心地であっただけでなく、日欧の交流史上においても異文化の接触と受容が行われた地域であり、現存する“モノ”からも拠点地域であったと考えられる。

2 崎津集落に残る信仰遺物

キリシタン時代の信心具の中でも、メダイ・ロザリオは、とりわけ強くもとめられたものの一つである。崎津においても、その用い方に関する多くの記録を確認することができる。また、崎津は漁村特有の、アワビやタイラギ貝など、海に関するものを信仰遺物として祭壇に祀られている。現在、崎津の信仰遺物のほとんどは崎津教会に寄贈されているが、県外に散逸しているものもある。今回は崎津資料の中でも、天草島内に現存しているものを中心に報告する。



第 14 図 崎津小高浜出土遺物実測図 (1/2、1/3)

崎津小高浜出土遺物 (天草市立天草キリシタン館蔵)(第 14 図)

小高浜出土資料は、道路の拡幅工事中に発見されたもので、出土状況は不明である。1～5 はロザリオの部材である。1 は高さ 1.2cm、最大幅 1.4cm を測る。水晶製である。2 は高さ 1.5cm、最大幅 1.2cm を測り、暗青灰色の石製である。3 は高さ 1.8cm、最大幅 1.3cm を測る。水晶製である。4 は高さ 0.8cm、最大幅 3.6cm を測る。木製であり、端部が欠損している。5 は高さ 3.4cm、最大幅 1.1cm を測る。木製で、鑄孔に紐の擦痕が残る。6 はメダイであり、高さ 8.7cm、最大幅 7.1cm を測る。銅・鉛・錫製であり、大型のメダイである。図像は無原罪の MARIA、ラ・ストルタでの聖イグナチオを表す。7 は安平壺(陶磁器)であり、高さ 13.5cm、最大幅 12.8cm、口径 5.2cm を測る。外面は回転ヘラケズリによる成形であり、胴部に 1 条の沈線が走る。これは上部、下部と分けて成形し、両者を合わせた際の条線であり、ヨコナデを施し接合している。釉は明褐色を呈す。底部には複数の指頭圧痕が残る。

崎津教会史料館所蔵資料 (第 15 図・第 16 図)

今回は崎津教会史料館に所蔵されている信仰遺物のみ調査を行った。以下の資料は、崎津住民より寄贈を受けたものがほとんどである。

1～6 はメダイである。1 は高さ 2.25cm、幅 1.7cm、厚さ 1.5mm、重量 2g を測る。三方突起を有す楕円形で、紐の穿孔は横方向、紐下段に方形段を有す鉛・錫製である。A 面には聖母子像、B 面には無原罪の MARIA を表す。2 は高さ 2.1cm、幅 1.15cm、厚さ 2.5mm、重量 1g を測る。楕円形で、紐の穿孔は横方向、紐下段に方形段を有す鉛・錫製である。A 面にはキリスト半身像、B 面には MARIA 半身像を表す。3 は高さ 2.65cm、幅 1.85cm、厚さ 2.0mm 重量 4g を測る。三方突起を有す楕円形で、紐の穿孔は横方向、紐下段に方形段を有す鉛・錫製である。A 面にはキリスト半身像、B 面には聖カルロ・ボッロメオを表す。4 は高さ 2.55cm、幅 1.9cm、厚さ 2.0mm、重量 3g を測る。楕円形で、紐の穿孔は正面、銅・鉛・錫製である。A 面には無原罪の MARIA、B 面には十字架 +M+ イエスと MARIA の心臓を表す。5 は高さ 3.4cm、幅 2.2cm、



第 15 图 崎津教会史料館所藏遺物拓本①



第 16 図 崎津教会史料館所蔵遺物拓本・実測図②

厚さ 3.0mm、重量 7g を測る。楕円形で、紐の穿孔は横方向、鉛・錫製である。A 面にはキリスト半身像、B 面にはマリア半身像を表す。6 は高さ 3.2cm、幅 2.1cm、厚さ 3.5mm、重量 8g を測る。楕円形で、紐の穿孔は正面、鑄造時のバリが残る鉛・錫製である。A 面にはキリスト半身像、B 面にはマリア半身像を表す。7 は道光通宝で、高さ 2.5cm、幅 2.45cm、厚さ 1.5mm、重量 5g を測る。8・～ 10 は宝永通宝である。8 は高さ 3.8cm、幅 3.8cm、厚さ 1.5mm、重量 9g を測る。9 は高さ 3.6cm、幅 3.8cm、厚さ 1.5mm、重量 9g を測る。10 は高さ 3.8cm、幅 3.8cm、厚さ 1.5mm、重量 9g を測る。11 は天啓通法で、高さ 4.3cm、幅 4.4cm、厚さ 2.0mm、重量 22g を測る。12～ 15 はメダイである。12 は高さ 2.0cm、幅 2.15cm、厚さ 1.5mm、重量 5g を測る。楕円形で、紐は欠損している鉛・錫製である。A 面にはキリスト磔刑、B 面には無原罪のマリアを表す。13 は高さ 4.5cm、幅 3.3cm、厚さ 2.0mm、重量 6g を測る。楕円形で、紐の穿孔は正面方向、柱内より発見されたもので、鉛・錫製である。A 面にはキリスト半身像、B 面にはマリア半身像を表す。14 は高さ 3.7cm、幅 2.65cm、厚さ 3.0mm、重量 9g を測る。楕円形で、紐の穿孔は横方向の真鍮製である。A 面にはキリスト半身像、B 面にはマリア半身像を表す。15 は高さ 3.55cm、幅 2.6cm、厚さ 2.0mm、重量 7g を測る。楕円形で、紐の穿孔は正面方向の真鍮製である。A 面には聖イグナチオ、B 面にはコルトンのマルガリータを表す。16 は十字架で、高さ 3.3cm、幅 1.9cm、厚さ 3.0mm、重量 2g を測る。鉛・錫製でキリスト磔刑を表す。17～ 19 はメダイである。17 は高さ 2.5cm、幅 2.75cm、厚さ 2.0mm、重量 4g を測る。円形で、紐欠損の鉛製である。18 は高さ 2.6cm、幅 2.4cm、厚さ 1.0mm、重量 7g を測る。円形で、紐下段方形の鉛製である。A 面にはキリスト半身像、B 面にはマリア半身像を表す。19 は高さ 2.0cm、幅 1.5cm、厚さ 1.0mm、重量 1g を測る。楕円形で、紐の穿孔は正面方向の白蝶貝製である。A 面にはキリスト磔刑、B 面には無原罪のマリアを表す。20 は懸仏で銅・鉛製である。21 は聖遺物入れで、鉛・錫製に金箔貼を施す。高さ、5.5cm、幅 4.3cm 厚さ 1.0 各面には受難具（上面に「歯抜き」、側面に「ロンギヌスの槍」、十字架上のキリストに葡萄酒を海綿にひたし葦の棒の先につけ口に運んだ「葦」、「サイコロ」）が刻まれている。22 は層塔塔身部で高 12.6cm、幅 19.4cm、奥行 18.8cm を測る。23 は宝塔塔身部で、高さ 42.3cm 幅 26.0cm、奥行 25.0cm を測る。両者ともに阿蘇溶結凝灰岩製で、四面に如来座像を半肉彫で表す。

表3 崎津教会史料館収蔵資料一覧

| 指図番号 | 資料名 | 形態 | 材質 | 図像 | | 法量 | | | | 穿孔 | 備考 |
|------|-------|-------|---------|---------|------------------|---------|------|--------|-------|-----|--|
| | | | | A面主題 | B面主題 | 最大高(mm) | 最大幅 | 厚さ(mm) | 重量(g) | | |
| 1 | メダイ | 突起楕円形 | 鉛・錫 | 聖母子像 | 無原罪のマリア | 22.5 | 17 | 1.5 | 2 | 横 | 三方突起、紐下段方形 |
| 2 | メダイ | 楕円形 | 鉛・錫 | キリスト半身像 | マリア半身像 | 21 | 11.5 | 2.5 | 1 | 横 | 紐下段方形 |
| 3 | メダイ | 突起楕円形 | 鉛・錫 | キリスト半身像 | 聖カルロ・ボッロメーオ | 26.5 | 18.5 | 2 | 4 | 横 | 三方突起、紐下段方形 |
| 4 | メダイ | 楕円形 | 銅・錫・鉛 | 無原罪のメダイ | 十字架+M+イエスとマリアの心臓 | 25.5 | 19 | 2 | 3 | 正面 | A面 O MARIE CONCUE SANSDECHIE PRIEZ POUR NOUR QUI AVONS RECOURE |
| 5 | メダイ | 楕円形 | 鉛・錫 | マリア半身像 | キリスト半身像 | 34 | 22 | 3 | 7 | 横 | |
| 6 | メダイ | 楕円形 | 鉛・錫 | マリア半身像 | キリスト半身像 | 32 | 21 | 3.5 | 8 | 正面 | 鑄造時のバリが残る |
| 7 | 道光通宝 | - | 銅 | 道光通寶 | 卐 | 25 | 24.5 | 1.5 | 5 | - | - |
| 8 | 宝永通宝 | - | 銅 | 寶永通寶 | 永久世用 珍 | 38 | 38 | 1.5 | 9 | - | 珍は久・世間 |
| 9 | 宝永通宝 | - | 銅 | 寶永通寶 | 永久世用 珍 | 36 | 38 | 1.5 | 9 | - | 珍は久・世間 |
| 10 | 宝永通宝 | - | 銅 | 寶永通寶 | 永久世用 珍 | 38 | 38 | 1.5 | 9 | - | 珍は久・世間 |
| 11 | 天啓通宝 | 大銭 | 銅 | 天啓通寶 | 卐 | 43 | 44 | 2 | 22 | - | - |
| 12 | メダイ | 楕円形 | 鉛・錫 | キリスト磔刑 | 無原罪のマリア | 20 | 21.5 | 1.5 | 5 | - | - |
| 13 | メダイ | 楕円形 | 真鍮 | キリスト半身像 | マリア半身像 | 45 | 33 | 2 | 6 | 正面 | 柱に隠されていたメダイ |
| 14 | メダイ | 楕円形 | 真鍮 | キリスト半身像 | マリア半身像 | 37 | 26.5 | 3 | 9 | 横 | - |
| 15 | メダイ | 楕円形 | 真鍮 | 聖イグナチオ | コルトンのマルガリータ | 35.5 | 26 | 2 | 7 | 正面 | - |
| 16 | 十字架 | - | 鉛・錫 | キリスト磔刑 | キリスト磔刑 | 33 | 19 | 3 | 2 | 横 | 紐下段方形 |
| 17 | メダイ | 円形 | 鉛 | キリスト磔刑 | 無原罪のマリア | 25 | 27.5 | 2 | 4 | - | - |
| 18 | メダイ | 円形 | 鉛 | - | 聖杯礼拝 | 26 | 24 | 1 | 7 | - | 紐下段方形 |
| 19 | メダイ | 楕円形 | 白蝶貝 | キリスト磔刑 | 無限罪のマリア | 20 | 15 | 1 | 1 | 正面 | - |
| 20 | 懸仏 | - | 銅・鉛 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 21 | 聖遺物入れ | 十字架 | 鉛・錫・金箔張 | - | - | 55 | 43 | 10 | - | 1つ残 | 乳は1つ残存 |
| 22 | 層塔 | 塔身部 | 阿蘇溶結凝灰岩 | 四面如来座像 | 四面如来座像 | 126 | 194 | 188 | - | - | 四面に龕を穿ち四面に配置 |
| 23 | 寶塔 | 塔身部 | 阿蘇溶結凝灰岩 | 四面如来座像 | 四面如来座像 | 423 | 260 | 250 | - | - | 四面に龕を穿ち四面に配置 |

V まとめ

今回の調査は、崎津古墓の造営の動向、潜伏キリシタンとの関係性の有無、遺跡の内容把握と性格付けを目的に行った。調査にあたっては、170基の立碑と27基の基壇状遺構を確認した。

長崎地方においては、基壇状遺構と酷似する「長墓」と呼ばれる長方形ないし正方形の石組みが存在しており、各自治体の発掘調査により石組下部から、墓坑が確認されている。こうした同型式の遺構の存在から、調査区の立碑及び基壇状遺構周辺を検出したが、遺構は確認できなかった。また現状を留めていない立碑、崩れている基壇状遺構の直下についても精査したが、地下遺構は伴わないことが明らかとなった。

調査区において、立碑や基壇状遺構が、地下遺構を伴わない点については、近世における両墓制の可能性を検討している。享保十七年～寛政元年までに編纂された『天草郡村々明細帳』内の「崎津村明細」によると、崎津地区は、享保十七年に人口1448名であったのが、文化六年に2457名と約2倍となっている。ただし、享和元(1801)年、文化十(1813)年、天保五(1834)年の3度の疱瘡流行によって人口が急減している。この他、崎津は密集集落のため、火事の記録も多く、文政五(1822)年に戸数157軒中86軒、文政九(1826)年に158軒中138軒が焼失し、多数の死者を出したことが記録に残る。調査区の墓塔は、疱瘡が流行した後の享和・文化・天保年間に造立が集中していることから、遺体が残らなかった、あるいは、別の場所に遺体を埋葬した可能性から、近世両墓制が採用されていた可能性を示している。ただし、天草における近世両墓制の比較資料は、今のところ確認されてはならず、その全容把握は今後の課題となる。

また、調査開始時より、調査区内にキリシタンの墓と特定できる痕跡があるかという課題があった。地域に残る文書『宗門改帳文化二年仏像差出名前帳』、『村明細享保十七年条』に、禁教下におけるキリシタン取調べを受けた潜伏信者「傳治郎」、「松之助」、「辰五郎」、「ゆく」、「善吉」、「はつ」の名前と、立碑6基の紀年銘が一致することが明らかとなった。他方、刻まれた家紋から潜伏キリシタンの墓と特定できた立碑の1つの基壇部より、クルス状十字痕が確認された。この十字痕は、基礎を安置すると隠れる位置に刻まれており、十字痕の形状や位置から、墓塔制作時の割り付け痕とは考えにくく、潜伏キリシタン墓であることを鑑みれば、西洋のクルス十字痕の可能性は非常に高い。遺構の配列については、平地では等間隔に配置するのではなく「イエ」単位で区画し、斜面地では、石列で区画した階段状構造をとる仏教系統の墓地が展開される。潜伏キリシタンとして取調べを受けた人物の墓が明らかになったのは、全国的にも初の成果であり、崎津の潜伏キリシタンらは、この墓域で表向きは仏教徒として仏教式墓地を造営し、密かに祖先信仰を行っていたのである。

出土した紅皿については、先のとおり女性の有していたものと考えられる。天保三(1842)年長崎代官高木作右衛門の書簡によると、崎津は商業に従事する廻船の港であり、船の出入りが多いため、船宿を営むものが多いと伝える。加えて、慶応三(1867)年『諸運上物并農間諸稼其外書上帳』によると、崎津には船宿が17軒存在していた。こうした宿には多くの女性が出稼ぎに来ていたという。ヒアリング調査においては、近代まで海上構造物「カケ」に係船し、そのまま宿に入る海商を海岸で待つ女性が多く存在したという。こうした女性達が使用してい

葬た、あるいは、威信財として代々継承された2枚セットの紅皿が、崎津古墓に副葬品として埋されたと想定している。この紅皿と同型式のものが、天草市天草町高浜窯跡から出土している。釉や胎土の成分から、本遺跡の出土品は、当時操業の最盛期を迎えていた同大江組高浜からの流通品であると考えられる。

加えて、崎津は潜伏期に価値を見いだされた地域である。今回の調査で、崎津古墓もその一つとなったが、潜伏期を象徴する「モノ」は「隠しメダイ」の存在と考える。厳しい弾圧の中で、キリシタンであることが発覚すると、地獄行きの烙印を押されるにもかかわらず、キリスト教の信仰を続け、パライソに至り、永遠の命、来世における家系すべての人間の幸福に希望を抱き信仰を続けている。信仰を継続し、代官所に発覚しないよう、家屋の柱を切り、ソケットを作り、中を削りぬき、その中にメダイを納めたにの工夫や、信念が窺える。

中世において、貿易拠点でもあった羊角湾最奥の河内浦には、南蛮文化とともにキリスト教が布教した。港に面する河内浦城では、ベトナム産鉄絵大皿や磁州窯系鉄絵龍文壺など出土している。大皿や壺など、空間装飾的要素が濃厚な器種が出土している点が、河内浦城跡の特徴であるが、これらは室礼用のアンティークとして珍重された。また、当時のキリスト教信仰遺物として、白蝶貝の螺鈿を用いたメダイが現存している。現在、天草コレジヨ館に所蔵されている白蝶貝のメダイも崎津資料であり、海村特有の文化が信仰に現れた所産ではないかと考えられる。教会史料館においてひときわ目を引くのが、金箔張りをした聖遺物容れである。中は中空で、乳3つを欠損している。日本国内においても、南島原市原城跡など信仰の拠点施設から出土しているが、これほど完全な形で残存している例は、非常に稀である。この他にも他地域に類を見ないものが複数搬入されていることから、河内浦のなかでも、崎津が布教の中核地点であったと想定される。

こうした華々しい布教の痕跡とは異なり、布教により破壊されたモノも存在している。向江岬の灯台付近を海鳴瀬の鼻と呼ぶが、ここから引き上げられたのが、14世紀中葉の所産である仏教の石造物2点である。大村藩では初期キリシタン時代にキリシタンによって神社仏閣の破壊・焼き討ち、仏教墓の破壊が、キリシタン大名であった有馬氏の居城日野江城跡では、仏教の墓石を階段に転用するなど、仏教墓石の破壊が確認でき、崎津についても同様に、キリシタンによる仏教文物の破壊と想定している。

その後、厳しい弾圧・潜伏期には、「絵踏み」や潜伏キリシタン発覚事件「天草崩れ」などの痕跡が集落内に多く残る。こうした潜伏期に隆盛する崎津古墓は、紀年銘や出土遺物から18世紀中葉を初限とし、20世紀初頭まで営まれた近現代の遺跡であり、潜伏キリシタンと特定できる人物の墓を含み、かつ、当地の両墓制、従来不明瞭であった紅皿の使用方法などを考える上で重要な遺跡である。

今回の調査では、崎津古墓、そして集落に残る遺物を概観することで、崎津の布教期そして弾圧・潜伏期の価値の補足が出来たが、いくつかの課題も残している。近世墓地の調査は、全国的にも隆盛してきているものの、今だ開拓過程にある分野でもある。本調査における課題には、今後も調査を継続しながら解明するとともに、天草における近世墓の成立の検討についても将来的な課題としたい。

写真図版



Ⅲ区全景 (東から)



Ⅳ区全景 (東から)



I区全景 (東から)



II区全景 (東から)



III区全景 (東から)



IV区全景 (東から)



V区全景 (東から)



V区 ラテン語墓碑



S K -2(西から)



S K -5(東から)



S K -10(東から)



S K - 22(東から)



S K - 22(北から)



S K - 17(東から)



S K - 17(南から)



S K - 17(西から)



S K - 17(北から)



S K - 1(東から)



S K - 1(北から)



Ⅲ区基壇状遺構



Ⅳ区南側全景



Ⅳ-8号墓



Ⅳ-9号墓



V-7号墓



I-8号墓



V - 22号墓



IV - 20号墓



V - 11号墓



V - 23号墓



出土遺物 (紅皿)

報告書抄録

| | | | | | |
|--------|--|------------------|---------------|----------|------|
| ふりがな | さきつこぼ 1 | | | | |
| 書名 | 崎津古墓 1 | | | | |
| シリーズ名 | 天草市文化財調査報告書 | | | | |
| シリーズ番号 | 第 4 集 | | | | |
| 編著者名 | 山内 亮平 | | | | |
| 編集機関 | 天草市役所 観光文化部 世界遺産推進室 | | | | |
| 所在地 | 〒 863-1202 熊本県天草市河浦町河浦 5253 T E L 0969-76-1116 F A X 0969-76-1359 | | | | |
| 発行年月日 | 平成 27 年 3 月 31 日 | | | | |
| ふりがな | ふりがな | 北緯 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 東経 | | | |
| さきつこぼ | くまもとけんあまくさし | 32° 18' 42" | 20140420 | 1,580㎡ | 学術調査 |
| 崎津古墓 | かわうらまちおおあざ崎津 熊本県天草市河浦町 大字崎津 | ～ 130° 1' 30" | ～ 20140930 | | |
| 所収遺跡名 | 種 別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | |
| 崎津古墓 | 近世墓 | 江戸時代 ～昭和 | 基壇状遺構 整形墓碑 | 紅皿、古銭、染付 | |
| 特記事項 | | | | | |
| 要 約 | <p>崎津古墓は、18 世紀中葉から 20 世紀初頭まで営まれた近現代の遺跡である。調査にあたっては、170 基の立碑と 27 基の基壇状遺構を確認した。立碑や基壇状遺構については、遺構検出において地下遺構は検出されず、地上モニュメントのみ存在している。地域に残る地誌類からは、自然災害や疱瘡の流行により遺体が残らなかった、あるいは、別の場所に遺体を埋葬した可能性があり、近世両墓制ではないかと想定している。また、潜伏キリシタンと特定できる人物の墓を含み、地域に残る文書『宗門改帳文化二年仏像差出名前帳』、『村明細享保十七年条』に、禁教下におけるキリシタン取調べを受けた潜伏信者の名前と、立碑 6 基の紀年銘が一致することが明らかとなった。出土した、紅皿は、おおよそ 18 世紀の所産であるが、威信財として代々継承された可能性も高く、2 枚セットで出土することがわかった。</p> | | | | |

崎津古墓 1 天草市文化財調査報告書 第4集

平成 27 年 3 月 31 日 発行

発 行 天草市役所 観光行文化部 世界遺産推進室
〒 863-1202 熊本県天草市河浦町河浦 5253
T E L 0969-76-1116 F A X 0969-76-1359

